松江市文化財調査報告書 第143集

ニトリ松江店新築工事に伴う

石屋遺跡発掘調査報告書

平成23(2011)年3月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第143集

ニトリ松江店新築工事に伴う

石屋遺跡発掘調査報告書

平成23(2011)年3月

松 江 市 教 育 委 員 会

財団法人 松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は、平成22年度に調査を実施した、ニトリ松江店新築工事に伴う石屋遺跡発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は株式会社ニトリホールディングスから松江市教育委員会が委託を受け、財団法人 松江市教育文化振興事業団が実施した。

3．本調査地の名称・所在は以下の通りである。

（名　　称）石屋（いしや）遺跡

（所 在 地）島根県松江市東津田町字石屋1888番地1、外9筆

4．現地調査の期間

（本 調 査）平成22年10月１日～10月８日

（立会調査）平成22年11月５日～11月17日

5．開発面積及び調査面積

開発面積　5910.87㎡

調査面積　本 調 査　112.5㎡

立会調査　240.2㎡

6．調査組織

依 頼 者　株式会社ニトリホールディングス

主 体 者　松江市教育委員会

平成22年度【発掘調査】

事 務 局	松江市教育委員会		教 育 長	福島　律子
	〃	文化財課	課　　長	錦織　慶樹
	〃	〃　調査係	係　　長	赤澤　秀則
	〃	〃　〃	主　　任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	島根県教育庁	文化財課	企 画 員	池淵　俊一
実 施 者	財団法人松江市教育文化振興事業団		理 事 長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課	課　　長	大西　　誠
	〃	〃　調査係	係　　長	中尾　秀信
	〃	〃　〃	専門企画員	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃　〃	調 査 員	石川　　崇（調査担当者）
	〃	〃　〃	調査補助員	大西　総司
	〃	〃　〃	〃	小山　泰生

7．調査に携わった発掘作業員

落合昇、門脇祐介、小松原茂、杉原正、杉原文子、松尾稔

8．本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書に携わった遺物整理員

高尾万里子　　善家幸子

9．調査及び報告書の作成にあたっては、以下の機関や方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

島根県教育庁埋蔵文化財調査センター　丹羽野裕、伊藤徳広

10. 本書に掲載した現場写真、遺物写真は石川が撮影した。

11. 本書の執筆・編集は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、石川・小山が行った。

12. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

（弥生土器）松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

13. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海抜標高を示す。

14. 本書における遺構記号は以下の通りである。

SK：土坑

15. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と調査方法
　第１節　調査に至る経緯（教育委員会）…… 1
　第２節　調査方法とその経過（石川）…… 1

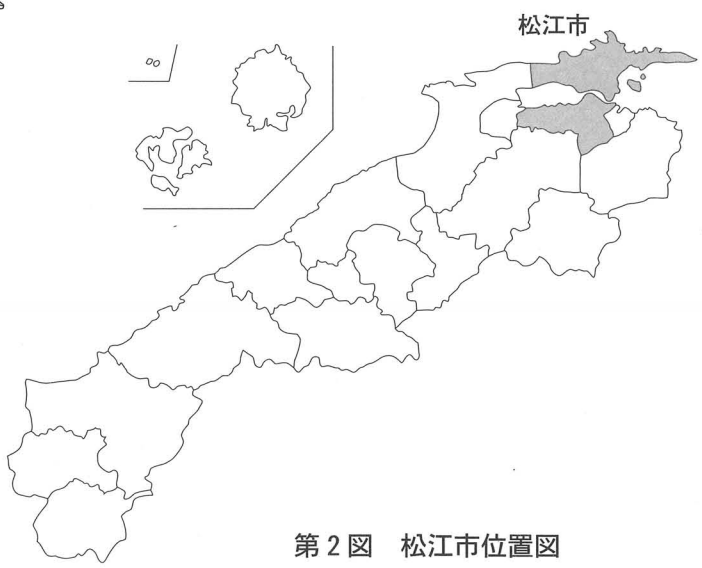
第２章　遺跡の地理的・歴史的環境（石川）…… 4

第３章　調査成果（石川）
　第１節　土層堆積状況…… 7
　第２節　調査成果について…… 9
　第３節　出土遺物について…… 9

第４章　立会調査の成果（小山）
　第１節　立会調査の手法…… 13
　第２節　土層堆積状況…… 13
　第３節　遺　　構…… 18
　第４節　谷状地形埋土の出土遺物…… 19

第５章　総　　括（小山）…… 23

第１図　島根県位置図



第２図　松江市位置図

挿　図　目　次

第１図　島根県位置図
第２図　松江市位置図
第３図　調査地周辺図
第４図　調査前測量図 …… 2
第５図　試掘調査・建物解体に伴う …… 3
　　立会調査での出土遺物
第６図　周辺の遺跡位置図 …… 5
第７図　土層堆積状況模式図 …… 7
第８図　本調査　調査成果図 …… 8
第９図　Ｔ５出土遺物 …… 9
第10図　T10出土遺物 …… 10
第11図　T10出土遺物 …… 11
第12図　T12～T15出土遺物 …… 12
第13図　立会調査　調査区配置図 …… 14
第14図　石屋遺跡土層堆積図 …… 15
第15図　SK01土層断面図 …… 18
第16図　SK01出土遺物 …… 18
弟17図　Ａ区　出土遺物（土器・石器・剥片） …… 19
第18図　Ｂ区　出土遺物（土器） …… 20
第19図　Ｂ区　出土遺物 …… 21
　　（石器・加工痕をもつ石・剥片・残核）
第20図　Ｃ区、Ｄ区出土遺物 …… 22
　　（土器・加工痕をもつ石）

図　版　目　次

図版１（上）　調査前（建物解体前）全景（北西から）
　　（下）　調査前（建物解体後）全景（南西から）
図版２（上）　本調査 T12 完掘状況＜谷状地形西側肩部＞
　　（中）　本調査 T10 完掘状況
　　（下）　本調査 Ｔ８ 完掘状況（地山が削平されている）
図版３（上）　立会調査　Ａ区 谷状地形及び遺物包含層西側始点
　　（中）　立会調査　Ａ区 谷状地形３段目落ち込み
　　（下）　立会調査　Ｂ区 T10東壁
図版４（上）　立会調査　Ｃ区 北壁土層断面
　　（中）　立会調査　Ｄ区 谷状地形及び遺物包含層検出
　　（下）　立会調査　Ｄ区 谷状地形２段目落ち込み
図版５（上）　流木検出状況
　　（中）　SK01土層断面
　　（下）　立会調査（T10）付近土層断面（Ａ区）
図版６（上）　遺物出土状況（弥生土器）
　　（中）　遺物出土状況（弥生土器）
　　（下）　遺物出土状況（玉髄）
図版７　本調査出土遺物
図版８　立会調査出土遺物
図版９（上）　出土遺物（玉髄）
　　（下）　出土遺物
　　（玉髄：原石もしくはそれに近いもの）

第３図　調査地周辺図（１／5000）

第１章　調査に至る経緯と調査方法

第１節　調査に至る経緯

平成22年５月、株式会社ニトリホールディングス（当時、株式会社ニトリ）から松江市教育委員会文化財課宛てにニトリ松江店新築工事予定地内における埋蔵文化財有無の照会が行なわれ、文化財課は当該地については、未調査地であることから、試掘調査が必要であることの回答を行なった。これを受け、同年６月に試掘調査依頼書が提出され、７月５日と12日の２日間をかけ調査を行なうこととなった。試掘調査は計画地内で既存建物の空地部分に５本のトレンチ（Ｔ－１～Ｔ－５）を設定し重機による掘削を行った。試掘トレンチの規模は幅1.0m～1.5m、長さ3.5mである。調査の結果、２本のトレンチ（Ｔ－１、Ｔ－４）で地表下1.4m付近に存在する遺物包含層を確認した。出土した遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、玉髄原石であった。このことから当該地は遺跡であると判断し、字名から石屋遺跡と命名し回答を行った。

後日、両者は協議の場を持ち、すき取りが行なわれる深さは遺物包含層に影響を及ぼさないが、地盤改良工法および擁壁の設置場所は包含層を貫通することから発掘調査が必要となるため、包含層に影響を与えない工法に設計変更し遺跡が保護できないか協議を行った。

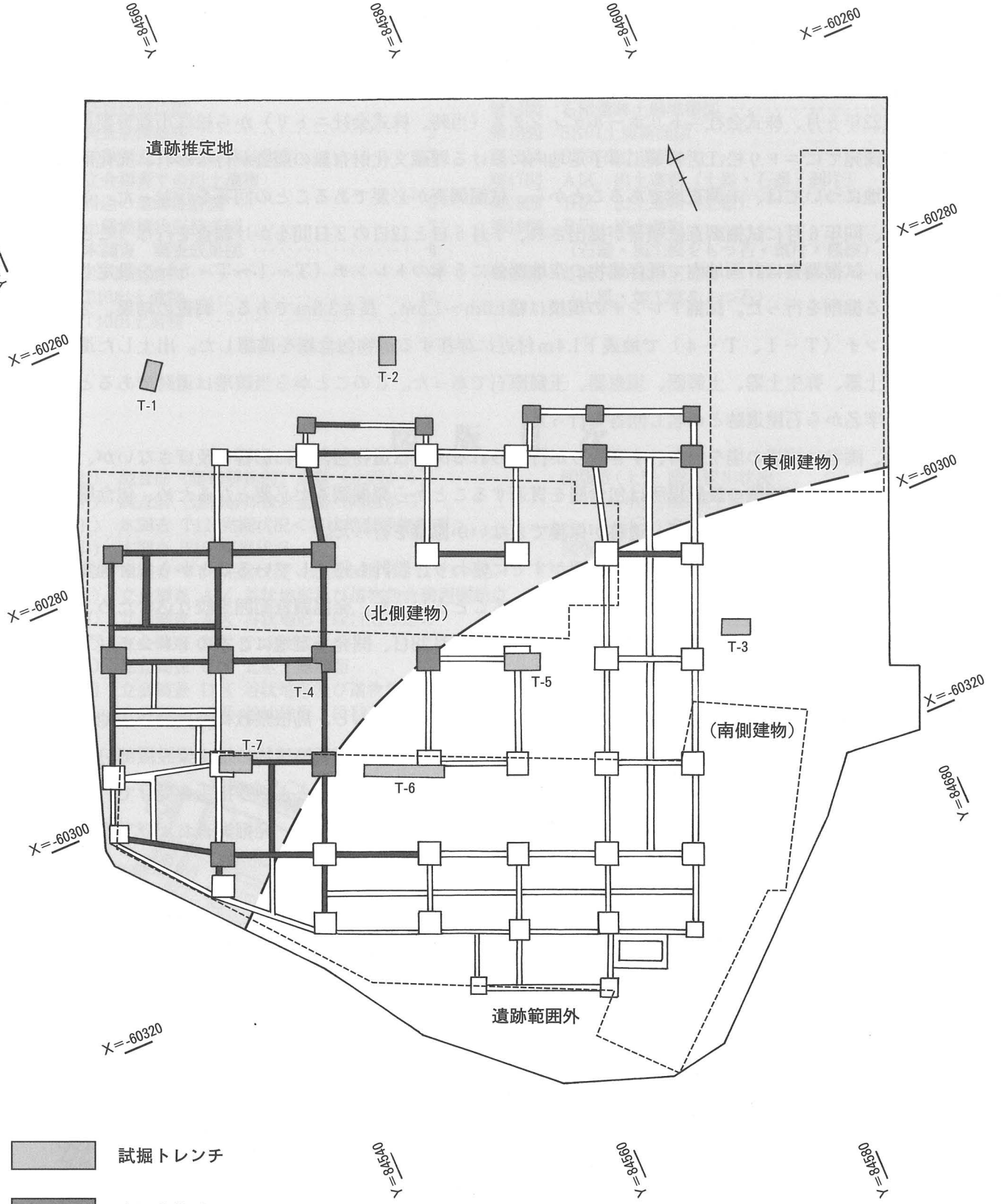
これに対し、ボーリング調査や地盤確認がすでに終わり、設計も終了していることから、計画変更は困難であるとの結論に達し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査範囲を絞り込むため、更に詳細な試掘調査が必要となったことから、平成22年７月28日、開発予定地に２本のトレンチ（Ｔ－６、Ｔ－７）を設定し、追加の試掘調査を実施した。

平成22年８月６日、埋蔵文化財発掘の届出が提出され、これに対し、島根県教育委員会から地盤改良工法箇所については発掘調査を実施し、既存建物の基礎撤去および新築建物の地中梁設置部分、擁壁設置箇所については面積が狭小であることから工事立会を実施することという指示を受けて、財団法人松江市教育文化振興事業団において平成22年９月から11月末までの間、発掘調査および工事立会を実施した。

第２節　調査方法とその経過

まず調査は遺跡推定地内の建物解体に伴う立会調査を９月14日～30日で行なった。遺跡推定地内の南側と東側には既存の建物（店舗および工場兼倉庫）が存在しており、その上屋解体後に建物基礎の撤去に際して立ち会い、遺構の有無や遺物の確認作業を行なった。遺跡推定範囲南側の既存建物は、南側の基礎部分は現況地表面下約１m程度まで掘削が及び、北側では旧耕作土の上に盛土を施して建物が建っていため、建物基礎はそれほど地中深くに影響を及ぼさず、遺物包含層には大きな影響を与えていなかった。一方、東側の既存建物は基礎部分が現況地表面下1.5m付近まで掘削が及び、そこで地山が検出されて、既に遺物包含層が削平されていた。この建物基礎撤去に伴う立会調査では、遺構が確認できず、遺物は玉髄片が１片出土しただけであった。

つづく本調査は、10月１日から建物基礎の支柱部分となる計18ヶ所について、重機による表土掘削と手掘りによって、遺構の有無と遺物の確認を行なった。支柱部分は2.5m四方、深さ約1.5m付近まで掘り下げて調査をおこなった結果、西側で谷状地形の痕跡と厚さ80～100㎝の遺物包含層が確認できた。東側は表土直下が地山の緑灰色土（45層）であり、既に削平されていると考えられた。


遺跡推定地
（東側建物）
（北側建物）
（南側建物）
遺跡範囲外
T-1
T-2
T-3
T-4
T-5
T-6
T-7
X=-60260
X=-60280
X=-60300
X=-60320
Y=84560
Y=84580
Y=84600
Y=84620
Y=84640
Y=84660
Y=84680
試掘トレンチ
本調査箇所
地中梁埋設に伴う
立会調査箇所
調査前既存建物
0
（1：500）
20

第４図　調査前測量図

遺物包含層からは、土器では弥生土器、土師器、須恵器、古代末～中世の土師質土器が出土したが、破片で摩滅しているものがほとんどであった。石では黒曜石片や玉髄片が数多く出土したが、加工痕と思しき痕跡はあるものの、明確に“石器”と断定できるものは少なかった。

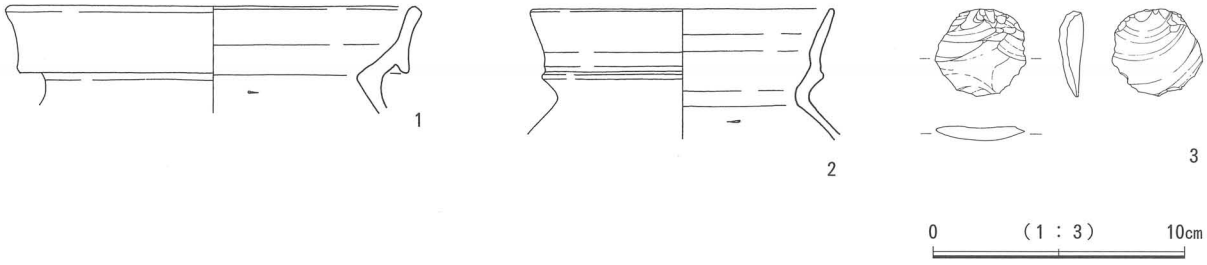
10月５日・８日に県教委による調査指導を開催し、８日に調査後の測量を行い終了した。なお本調査トレンチは安全上、完掘後の写真撮影、土層断面実測を終えると次々と埋め戻していかなければならず、調査終了後の全体の写真撮影はできなかった。

その後、建物の地中梁埋設に伴う立会調査を11月５日～17日まで行なった。この調査では西側で確認された谷状地形の復元と連続した土層断面図の作成を主眼に置き、限られた工事立会という時間の中で最大限の調査成果があげるよう工事関係者と綿密な打ち合わせを何度も行ない、調査に臨んだ。

この立会調査では工事関係者の協力もあり、東西51.64m、南北43.50mの土層断面図を作成することができた。またトレンチ状の調査となった本調査区においてできなかった遺物包含層の細分化とそれに伴う層位毎の遺物の取り上げを行なうことができた。この立会調査の詳細は第４章で述べる。

最後に試掘調査・建物解体に伴う立会調査で出土した遺物を紹介しておく。

１・２は試掘調査の際にＴ－７の暗灰色粘土層・灰色砂礫層から出土した弥生土器の口縁部片である。弥生後期の特徴を持つもので、１は口縁部下端がわすかに垂下し、２は口縁部下端がわずかに外側に突出する。３は後述する立会調査で出土した玉髄製の剥片である。ごく一部に剥離されたような痕跡がある。



第５図　試掘調査・建物解体の伴う立会調査での出土遺物

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は松江市街中心部より南東、松江市東津田町字石屋に位置する。本遺跡は松江平野の中央を東西に流れる大橋川や東側に馬橋川を望む丘陵地に存在し、東側には馬橋川と大橋川との合流地点、さらにその東側には旧河道や自然堤防がある。これは本遺跡の東側にある矢田付近が狭窄部で洪水時に大橋側の水位が上昇するためと思われる[註1]。また本遺跡の北側や東西両側に三角州が存在する。この三角州が現在のように陸地化したのは新しい時代で、『出雲国風土記』にはこの三角州上に神社や寺院の記載はなく、「大橋川」という名も近世初頭に「松江大橋」が建設されてから名づけられたもので、それ以前は「入海」の幅の狭い部分、湖の一部として意識されていた[註2]。

旧地形である丘陵地にはいく筋かの谷状地形が存在し、その谷状地形の合流地付近には田畑があった。この丘陵を昭和30年代後半に団地造成のための開発工事を行い、丘陵北側を削平し、住宅団地とした。調査地の旧地形は、その田畑部分であり、造成時に丘陵を削った土砂で埋め立てて平坦地を作ったと思われ、調査直前まで店舗が存在していた。

縄文時代の遺跡としては、馬橋川上流部に古くから知られる**石台遺跡（２）**が存在する。石台遺跡は馬橋川河川改修工事や国道９号線バイパスに伴って数度の調査が行なわれ、縄文時代から中世にかけて数多くの遺物が出土している。そのほかにも**保地遺跡（３）**などがある。

弥生時代の遺跡としては石台遺跡から中期後葉～後期初頭にかけての、その石台遺跡から東へ100ｍのところにある**勝負遺跡（４）**からは後期前半～古墳時代中期までの集落跡が確認されている。両遺跡が継続的な関係にあったのではないかと考えられる。**長峯遺跡（５）**からも弥生時代中期末～後期前葉頃の住居跡が確認されている。また**平所遺跡（６）**からは弥生時代～古墳時代初頭にかけての玉作工房跡が検出されている。

墳墓では後期に属する四隅突出型の**来美墳丘墓（７）**や**間内越墳丘墓群（８）**がある。来美墳丘墓は墳頂部に７つの埋葬施設を持ち、間内越墳丘墓群は４基の墳丘墓が確認されている。両者は茶臼山から派生する同じ台地上にあり、距離的にも600ｍほどしか離れておらず、関連性が考えられる。

古墳時代の集落として、中期後葉の竪穴建物跡が検出された**寺山小田遺跡（９）**や中期の竪穴住居跡とそれに付随すると考えられる掘立柱建物跡が検出された**矢田平所遺跡（10）**がある。

時期は不明ながら現在のところ、本遺跡の西側の丘陵部に**東光台古墳（11）**があり、高さ1.0～1.5ｍ程度の盛土が認められ、主体部は箱式石棺で内部から人骨が１体出土したが副葬品はなかった。また本遺跡東側の丘陵部に中期の**石屋古墳（12）**があり、一辺が約40ｍで造出部を持つ２段築成の方墳で、造出部には石列を持つ。周辺では前期古墳は社日１号墳、廻田１号墳、上竹矢７号墳が近年知られている。中期になると多くの大形古墳が出現する。**手間古墳（13）**は全長約70ｍの前方後円墳、**井ノ奥古墳群（14）**のうち、４号墳は全長57ｍの前方後円墳で円筒埴輪や朝顔形埴輪などが出土し、一辺が約42ｍの方墳である**大庭鶏塚（15）**、また前方後方墳の**岩舟古墳（16）**や方墳の**荒神畑古墳（17）**、などがある。

後期になると全長92ｍの前方後方墳の**山代二子塚（18）**などがある。馬橋川流域では、築造時期は不明ながら前方後方墳の、**高杉１号墳（19：高杉古墳群）**、**南外１号墳（20：南外古墳群）**などが分布している。

また横穴墓も多く見られ、丘陵山腹部につくられている。**十王免横穴群（21）**は37穴が確認され、

第６図　周辺の遺跡位置図

１．石屋遺跡　２．石台遺跡　３．保地遺跡　４．勝負遺跡　５．長峯遺跡　６．平所遺跡
７．来美墳丘墓　８．間内越墳丘墓　９．寺山小田遺跡　10．矢田平所遺跡　11．東光台古墳
12．石屋古墳　13．手間古墳　14．井ノ奥古墳群　15．大庭鶏塚　16．岩舟古墳　17．荒神畑古墳
18．山代二子塚　19．高杉古墳群　20．南外古墳群　21．十王免横穴群　22．東光台横穴
23．中竹矢遺跡　24．狐谷横穴群　25．出雲国山代郷正倉跡　26．出雲国分寺跡
27．出雲国分尼寺跡　28．山代郷南新造院　29．来美廃寺　30．小無田Ⅱ遺跡　31．才ノ峠遺跡
32．市場遺跡　33．茶臼山城跡

須恵器や土師器のほか、鉄器、玉類なども出土した。本遺跡西側の斜面には**東光台横穴（22）**があり、平入りの家形系の横穴で、玄室内に組合せ式石棺をもつ。**中竹矢遺跡（23）**では５穴確認されている。**狐谷横穴群（24）**が存在する。

律令時代になると意宇平野周辺に出雲国庁、意宇郡家、意宇軍団、駅、**出雲国山代郷正倉（25）**がつくられ、官立の**出雲国分寺（26）**や**出雲国分尼寺（27）**のほか、**山代郷南新造院（28）**、**来美廃寺（29）**などの私寺も建てられるようになった。また南新造院で使用された瓦を生産したと思われる**小無田Ⅱ遺跡（30）**や８世紀中葉から後半を中心とした集落跡であり、祭祀関連遺物も出土している**才ノ峠遺跡（31）**がある。中竹矢遺跡からも９世紀後半頃の掘立柱建物跡が検出されている。

中世遺跡としては12世紀代の白磁碗に伴って土師器皿が出土した中竹矢遺跡、同じく12～13世紀代の土師器が出土した石台遺跡などがある。15～16世紀代の可能性がある建物跡が確認された**市場遺跡（32）**、15～16世紀に機能していたと思われる**茶臼山城跡（33）**がある。

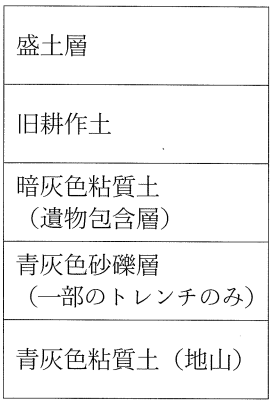
写真　本調査地の航空写真（1948年撮影）
（黒枠部分が調査地）

第３章　調査成果

第１節　土層堆積状況

本遺跡の土層の堆積状況の詳細については、後述する立会調査での第14図を参照されたい。ここでは本調査で得られた大まかな土層堆積状況を説明する。

まず表土層は建物基礎に伴う盛土層があり、その下には旧耕作土が見られた。その下、標高5.1m前後から2.9m付近まで主に暗灰色粘質土を中心とした１～５層にわたる遺物包含層が存在し、そこからは縄文土器や弥生土器、土師器などが出土した。さらにその下は10㎝大の玉髄を多量に含んだだ自然堆積層である青灰色砂礫層が見られるが、調査トレンチすべてにおいて見られたわけではない。そしてこの青灰色砂礫層土の下に地山である青灰色粘質土が堆積していた。



第７図　土層堆積状況模式図

表１　調査成果一覧表

ﾄﾚﾝﾁ	遺物包含層(標高)	地山（標高）	出土遺物	備考
Ｔ１	なし	削平（4.2m）	なし	
Ｔ２	なし	削平（3.7m）	なし	
Ｔ３	なし	削平（4.0m）	なし	
Ｔ４	なし	削平（3.7m）	なし	
Ｔ５	２層（2.9～3.1m）	2.9m	弥生土器、土師器、須恵器、玉髄	
Ｔ６	なし	削平（4.1m）	なし	
Ｔ７	なし	削平（4.2m）	なし	
Ｔ８	なし	削平（5.1m）	なし	
Ｔ９	なし	4.8m	なし	
Ｔ10	５層（3.2～4.6m）	3.0m	弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、石器、玉髄、黒曜石	
Ｔ11	５層（3.2～4.5m）	未検出	弥生土器、土師器、須恵器	砂質土検出
Ｔ12	１層（4.3～4.4m）	4.3m	玉髄	
Ｔ13	１層（5.0～5.3m）	5.0m	土錘、陶器、玉髄など	
Ｔ14	１層（4.9～5.1m）	4.8m	弥生土器、土師器、土錘、陶磁器、玉髄、黒曜石	
Ｔ15	５層（3.4～4.6m）	未検出	弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器	
Ｔ16	なし	4.3m		砂質土検出
Ｔ17	４層（3.1～4.2m）	3.1m	弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、磁器、玉髄	
Ｔ18	なし	3.9m		

第８図　本調査　調査成果図

第２節　調査成果について（第８図）

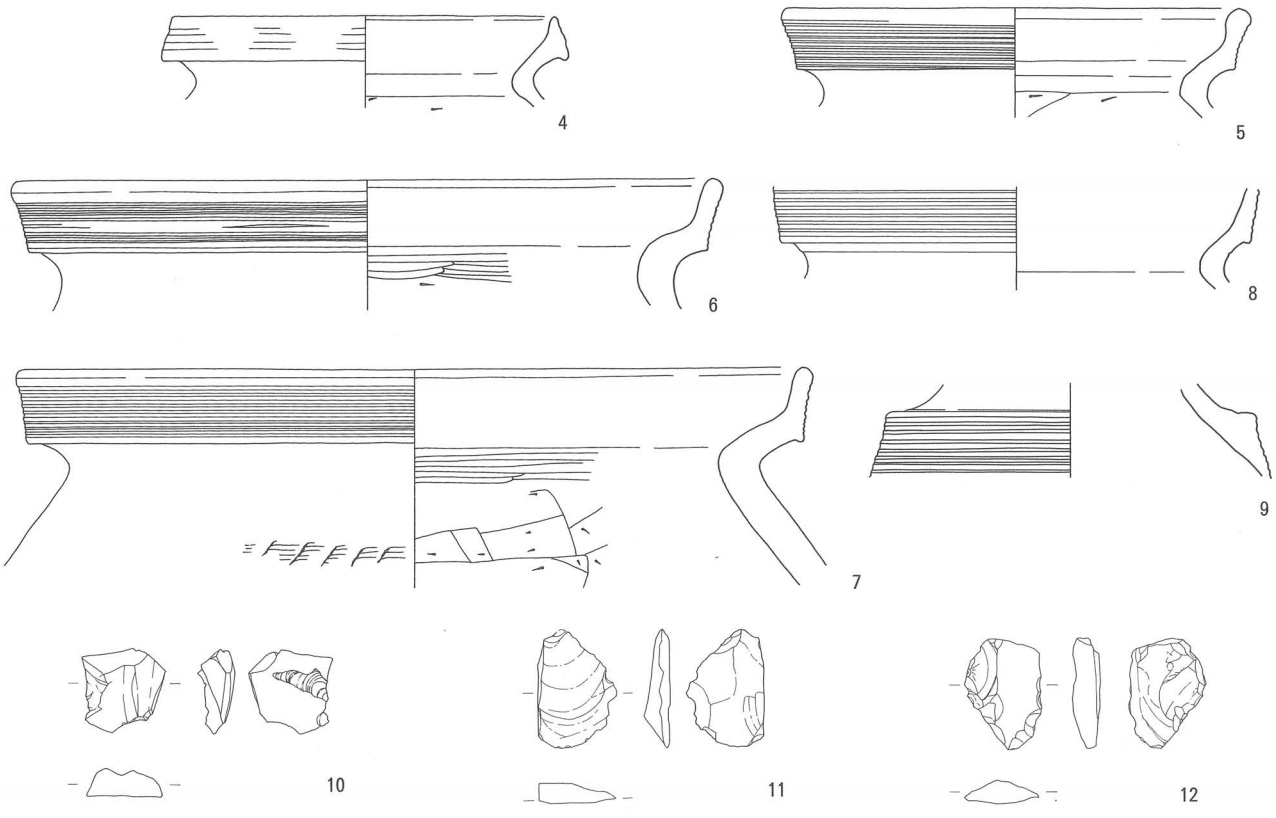
本調査では、設定したトレンチの東側（Ｔ１～３、Ｔ６～８）は盛土直下が地山であった。そのため地山が既に削平され、遺物包含層や遺構が検出できなかったが、中央部から西側（Ｔ４、Ｔ５、Ｔ９～18）にかけて谷状地形と思われる痕跡が確認できた。

中央部東側（Ｔ４、Ｔ５、Ｔ13）や西側（Ｔ12、Ｔ16）は標高５ｍ前後と比較的浅いところから地山が検出されたのに対して、その中間にあるＴ10、Ｔ11、Ｔ14、Ｔ15、Ｔ17、Ｔ18は地山が標高３ｍ前後の深いところで確認できた。この地山が深いところは谷状地形の底の部分を示すものと考えられ、その両側は落ち込みの肩部と思われる。しかし本調査の段階では西側でしか肩部と思しき痕跡を確認できず、東側では確認できていない。おそらくはＴ10、Ｔ14とＴ９、Ｔ13の間に東側の肩部があると想像され、試掘調査Ｔ－６でも落ち込みらしき痕跡が確認されている。

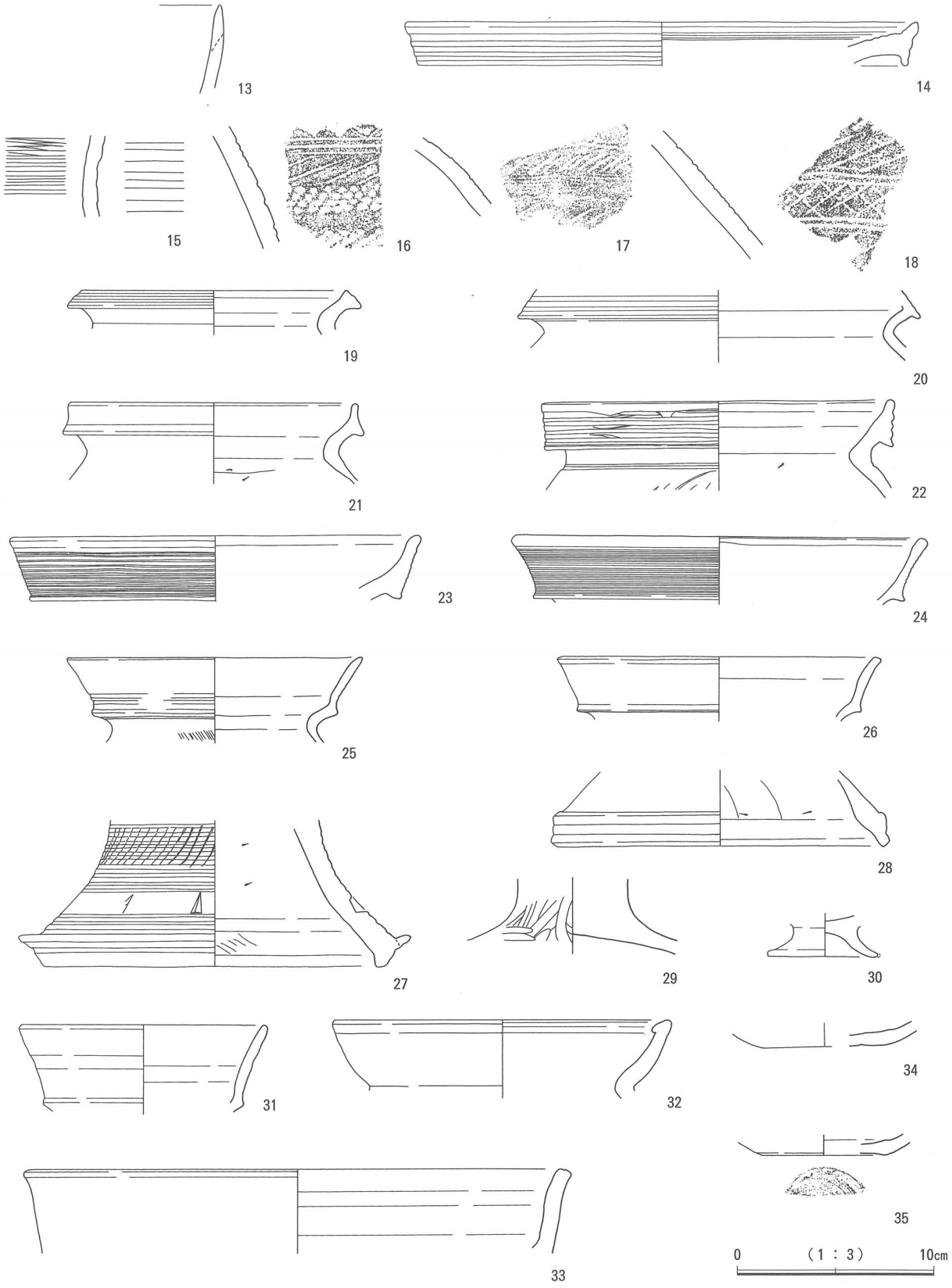
この時点では遺物包含層は１～５層あると見られていたが、出土遺物は一括で取り上げたため、層毎の取り上げができなかった。包含層から弥生土器や土師器、須恵器、土師質土器、石器類などが出土しているが、出土した土器片は細片が多く、しかも摩滅したものが大半であるため、遺跡周辺から流れ込んできたものと思われる。遺物は遺物包含層が厚く堆積しているＴ10付近から最も多く出土している。

第３節　出土遺物について（第８～11図）

ここでは各トレンチから出土した代表的な遺物を取り上げて紹介する。**４～７**はＴ４から出土した弥生土器の口縁部片で、いずれもＶ様式（後期）の特徴を持つものである。口縁部には貝殻腹縁によ



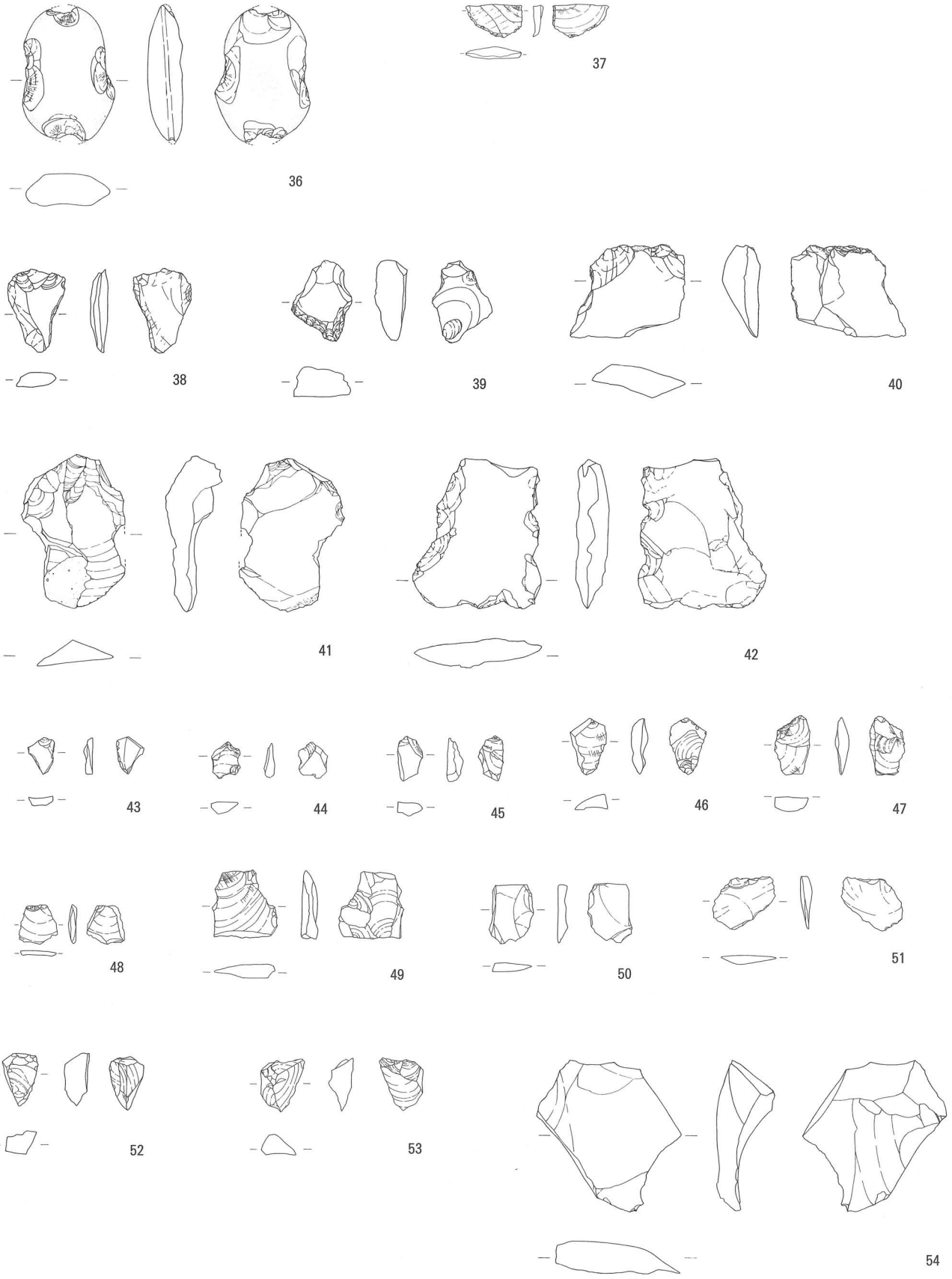
第９図　Ｔ５出土遺物



第10図　Ｔ10出土遺物

る擬凹線文を施し、内面にはヘラミガキ調整を施す。８・９はＴ５から出土した弥生土器で、８は壺もしくは甕の口縁部片で、９は器台の脚部片と思われる。いずれもＶ様式（後期）の特徴を持つ。

10・11はＴ５から、12はＴ６から出土したいずれも玉髄製の剥片で、打割面は見られるものの周囲には加工の痕跡は見られない。



第11図　Ｔ10出土遺物

13～35はＴ10から出土した土器片である。13は縄文土器で鉢の口縁部片と思われる。14～30は弥生土器である。14～18はⅣ様式（中期）の特徴を持つ。14は口縁部が外側に大きく開く壺の口縁部片で、口縁部には３条の凹線文が見られる。15～18は壺の肩部片で、15には凹線文が、16には斜格子文や刺突文、17には貝殻腹縁による列点文、18には凹線文、斜格子文がそれぞれ見られる。19～26はＶ様式（後期）の特徴を持つ土器片である。19～21は口縁部の平坦面が内傾し、凹線文を施す。22～26は口縁部の平坦面が直立もしくは外側に反り気味に立ち上がるもので、いずれも貝殻腹縁による擬凹線文が見られる。

27はⅣ様式（中期）の特徴を持つ器台の脚部片で、脚端部に凹線文を施し、三角形の透し穴が見られる。28はＶ様式（後期）の特徴を持つ高坏の脚部片で、脚端部に２条の凹線文が施されている。29は高坏の脚部片で外側にミガキ痕が見られる。30は低脚坏である。

31～33は土師器である。31は壺の口縁部片で、32は口縁端部が内側に内傾する甕の口縁部片で、33は口縁部が直立する形態の口縁部片である。34は須恵器で底部に回転糸切り痕をもつ坏の底部片である。35は土師質土器の底部片で、摩滅しているがおそらく底部に回転糸切り痕があったと思われる。

36～54はおなじくＴ10から出土した石器、加工痕を持つ石、剥片、残核である。36は石器で、頁岩製の石錘であり、上下左右の４ヶ所を打ち欠いて加工を施している。

37～42は加工痕を持つ石である。これらは人為的と思われる痕跡を持つが、どのような製品か断定できなかったものであり、こういった加工痕を持つ石が多く出土するのは本遺跡の特徴である。37は瑪瑙製で、下端部に細かい剥離痕が見られ、スクレイパー状の石器の可能性がある。38～42は玉髄製である。38は側面片側だけに加工が施され、反対側は自然剥離による痕が残る。39は下端部の表側だけに加工痕が見られ、裏面には見られない。形状から角錐状の石器の可能性がある。40は側面片側だけに細かい剥離の痕跡があり、41は側面両側に加工を施し、42は下部に細かな剥離痕が見られる。

43～51は剥片である。打割面は見られるが、その後の加工の痕跡が周囲に見られない。43～49は黒曜石製、50は安山岩製、51は玉髄製である。52～54は残核で、52・53は黒曜石製、54は玉髄製である。

55はＴ13、56はＴ14から出土した円筒状の土錘である。57は口縁部帯に沈線を持つ土師器の口縁部片である。

58はＴ12から出土した玉髄製の残核で、59はＴ13から出土した黒曜石製の剥片、60はＴ14から出土した黒曜石製の加工痕を持つ石である。表側の下端部のみ加工を施し、形状は石鏃に近い。

第12図　Ｔ12～Ｔ15出土遺物

第４章　立会調査の成果

第１節　立会調査の手法

本調査終了後、建物新築工事における地中梁埋設に伴う工事立会を行った。

立会調査では遺物が大量に出土する谷の堆積情況を把握するため、工事手順を変更していただき、谷の横断面・縦断面が確認できるよう配慮していただいた。ここでは便宜的にそれぞれの区間をＡ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区として取り扱う。各区間とも平面、断面での遺構・遺物確認調査と土層堆積状況の実測作業を行っている。

Ａ区は本調査時に確認された谷状地形の落ち込みの横断面を確認するためにＴ12を基点に設定した東西51.64m・南北1.50mの調査区であり、Ｂ区は谷状地形の勾配確認のために設定した南北43.50m・東西1.50mの調査区である。Ｃ区はＡ区の18m南側に設定した東西7.50m・南北1.50mの調査区、Ｄ区は同じく25m南側に設定した東西10.50m・南北1.50mの調査区である。これらＣ・Ｄ区は谷状地形が調査区内の山側（南側）に延びているのかを確認するために設定した。それぞれ土層断面の層位については第14図に示すとおりである。

以下、第２節では谷状地形部分における基本的な土層堆積状況について説明し、第３節では谷から検出された遺構について取り扱う。また、第４節では谷の覆土から出土した遺物について調査区ごとに成果を述べることとする。

第２節　土層堆積状況（第14図）

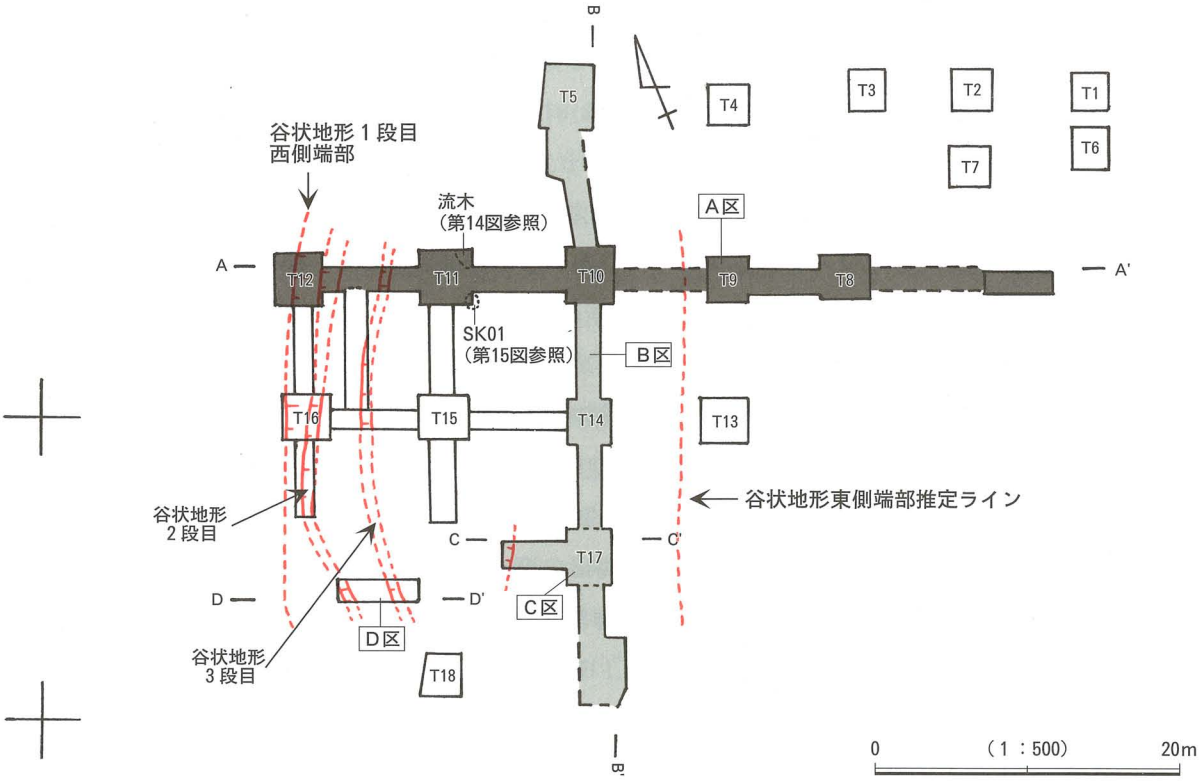
土層堆積状況については、そのつながりが把握できたＡ区とＢ区については一緒に取り扱うが、距離が離れていたり層序が十分に把握できなかったＣ区とＤ区については別個に取り扱うこととした。このため、Ａ区・Ｂ区、Ｃ区・Ｄ区については土色も別個としている。

１．Ａ区、Ｂ区

第14図の第１～９層までが近現代以降の盛土層で、これらの層には攪乱土や旧耕作土が含まれる。これらの層は立会調査前にあった盛土下に存在していたもので、立会調査前には盛土層は鋤き取りされていた。撹乱土は調査前にあった建物に伴うものと思われ、旧耕作土は、東光台団地造成以前に丘陵の谷部分を利用して段々畑が谷筋に沿って拡がるようつくられていたことが当時の航空写真等で確認されており、この段々畑に伴う耕作土と考えられる。これらの土層からは近代以降の陶磁器片やガラス片などが出土した。

現況地盤から約0.30m以下からは谷状地形の埋土を確認している。谷は階段状に削られ、３段の落ち込みを確認することができた。

まず１段目の落ち込みは標高4.20mで検出されており、その埋土は第17～21層である。これらは谷状地形を構成する最終段階の埋土と思われる。標高4.20m付近の第17層：暗灰褐色土が谷状地形最終段階の上層の埋土で、土質はよく締まっていて堅い土である。この層では谷状地形の西側端部が確認され、弥生時代後期の特徴を持つ甕の口縁部片と底部に回転糸切り痕をもつ須恵器の坏が混在して出土した。直下の標高4.00m前後に堆積する第18層は第17 層と同色ではあるが、やや粘性が強い。第21層：オリーブ灰色粘土層では高台付の須恵器が出土している。これらの層は弥生時代後期～中世の



第13図　立会調査　調査区配置図

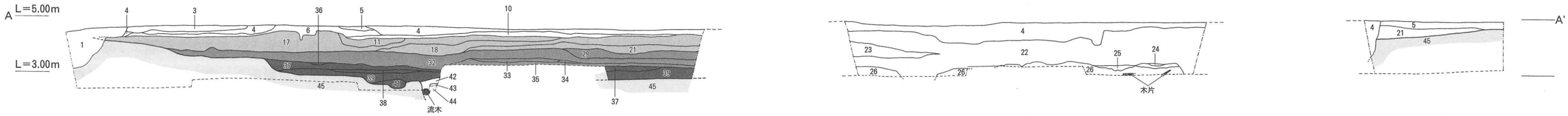
遺物を含んでいる包含層である。

２段目の落ち込みは標高3.70m付近で検出しており、その埋土は第32～35層である。第32層：暗黒褐色土層は標高3.70～3.20mに0.30～0.50m程度のやや厚い堆積をしており、粘性が強く、弥生土器、少量の須恵器片、土師器のほか土師質土器を含んでいる。第35層は第32層と酷似する土層で明灰色粘土が混じる。この層からは弥生時代後期の特徴をもった遺物が顕著に出土しているが、土師器も出土している。

３段目の落ち込みは標高3.20m付近で検出しており、その埋土は第37～39層である。第37層：淡灰色砂質粘土層からはＡ区では検出されているが、Ｂ区では確認されなかった。この層は弥生時代後期や古墳時代前期の土器が出土した。第39層：暗青灰色砂礫層は標高3.00m付近に堆積している層で、粗い砂粒の中に10㎝前後の玉髄を中心とした拳大の礫を多量に含んでいた。これらの玉髄は原石に近いものが多く、その中で人為的な加工痕と思われるものについては取り上げを行なった。また、この層からは縄文土器、弥生土器、黒曜石製の石鏃が出土した。この第39層はＢ区でも確認されており、堆積状況は南から北方向へ緩やかな傾斜を持ち、北側へ向かうほど厚くなっていくという様相であった。第39層直下の第41層：緑灰色砂礫層では上層の砂礫よりも密に礫が含まれていたので細分した層である。この層からは縄文土器が出土している。

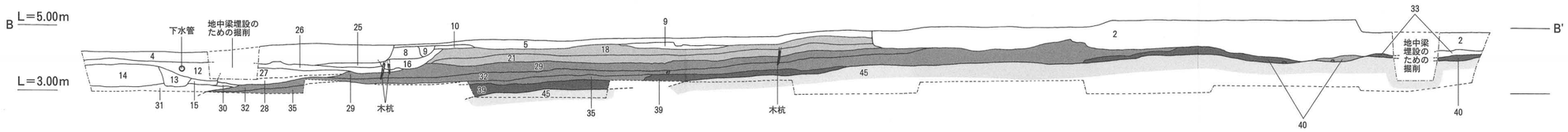
谷状地形の最深部に堆積している層が第42層：淡灰色粘土層で炭化物を含む層である。地山を直下するような落ち込みが一部見られ、埋土からは直径25㎝程度の流木と縄文土器が出土した。出土遺物から第39層、第41層は縄文時代中期から弥生時代中期の遺物包含層、第42層は縄文時代中期の土層と考えられる。

A　区



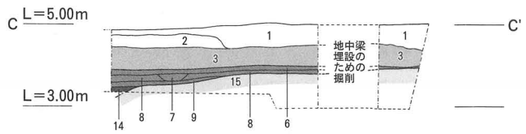
A区北壁土層断面図

B　区



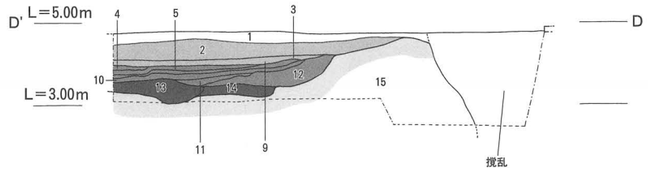
B区東壁土層断面図

C　区



C区北壁土蔵断面図

D　区



D区南壁土層断面図

谷状地形１段目の埋土（最終段階）
谷状地形２段目の埋土（第２段階）
谷状地形３段目の埋土（初期段階）

0　（１：150）　10m

C区・D区土層

1．撹乱土　2．暗褐色土　3．暗黒褐色土　4．淡灰白色粘質土　5．暗茶褐色土＋暗灰色粘質土
6．淡灰色砂礫層（砂質分を含む）　7．淡茶黒粘質土　8．暗茶褐色粘質土（有機物を含む）　9．淡灰色砂質粘土（有機質を含む）
10．灰色砂質粘土（有機物を含む）　11．暗灰色砂礫層（５～６㎝大の礫を含む）　12．灰白色粘土（粘性 強）
13．暗茶灰色砂礫層（こぶし大の礫が多い）　14．暗青灰色砂礫層（２～３㎝大の礫を多く含む）　15．緑青灰色土（地山）

A区・B区土層

1．撹乱土　2．撹乱土＋改良材　3．真砂＋撹乱土　4．茶白色粘質土（撹乱）　5．改良材を含んだ撹乱土　6．暗褐色土（耕作土）
7．灰白色砂質粘土（撹乱）　8．淡灰白色砂質粘土（粒子が粗い）　9．茶灰色粘土　10．灰白色粘質土（耕作土か？）
11．淡灰色粘質土　12．真砂土（配管工事に伴うもの）　13．砂利＋真砂土　14．茶白色土（撹乱）　15．茶白色土＋真砂土
16．淡灰色砂＋白色粘質土　17．暗灰褐色土（須恵器片を含む）　18．暗灰褐色土（粘性 強）　19．暗灰色砂質粘土（耕作土）
20．淡灰色粘質土（灰色ブロックを含む）　21．オリーブ灰色粘土　22．盛土（客土）
23．淡褐色＋緑灰色砂礫層（２～３㎝大の礫を多く含む）　24．淡茶灰色ラミナ　25．緑灰白色砂質粘土
26．黒灰色粘質土（炭・木片を多量に含む）　27．オリーブ灰色粘土（白色ブロックを含む）　28．オリーブ灰色粘土（白色ブロックを少量含む）
29．淡オリーブ灰色粘土　30．暗黒灰色粘土（粘性 強、耕作土）　31．暗灰色粘性シルト（陶磁器片を含む）
32．暗黒褐色土（粘性 強、弥生土器・土師器などを多量に含む）　33．暗黒色粘質土　34．灰白色粘土（小礫混じり）
35．暗黒褐色土＋明灰色粘土（弥生土器・土師器・須恵器などを多量に含む）　36．淡灰色砂　37．淡灰色砂質粘土
38．暗茶褐色粘土（有機物を含む）　39．暗青灰色砂礫層（遺物を含む）　40．淡灰色砂礫層（第39層よりも砂質分が多い）
41．緑灰色砂礫層（礫が密な状態）　42．淡灰色粘土（炭化物・縄文土器片を含む）　43．暗灰色粘土（小礫が混じる）　44．灰色砂
45．緑青灰色土（地山）

第14図　石屋遺跡土層堆積図

これらの層が包含層となっており、それぞれの時代の居住域が付近にあったことを示すものであろうと考える。また、包含層出土遺物の多くは破片・細片で摩耗を受けているが、このことは、南側から北側へ延びる谷状地形部分に流れ込み、礫の堆積がみられることなどから、土石流のような急激な流れのなかで移動して摩耗されたものと推察した。

基盤は第45層：緑青灰色土で、この層は非常に堅緻な岩盤である。

Ａ区では西端から23～28m地点（Ｔ10～Ｔ９区間）は建物基礎が入らないところであり、工事の工程上掘削されない部分もあった。本遺跡のＡ区土層堆積の全容を考えた場合、この５m区間内に谷状地形の東側端部があるものと推測されたが、今回の調査では確認できなかった。また、28～41m地点（Ｔ９～Ｔ８区間）については自然堆積が確認できず、表層は攪乱著しくそれ以下は客土が約1.0m程度堆積していた。標高3.30m付近では旧耕作土と思われる第26層：黒灰色粘質土が堆積しており、この層には流木のような木片が含まれていたが遺物は検出されなかった。立会調査のＡ区東側端部にあたる50m付近では、表層は攪乱土で、それ以下の標高4.20mで緑灰色土の非常に堅緻な岩盤を検出している。

２．Ｃ区

標高約5.00mが現況地盤で、上層の第１、２層は近現代の攪乱土である。表層以下、標高4.50mに堆積する第３層：暗黒褐色土は0.50mを測る厚い堆積で、この層からは土師器が出土している。直下の第６層：淡灰色砂礫層は薄い堆積層だが２～３㎝の礫と砂が混じり、弥生時代後期の甕片を含んでいる。第８層：暗茶褐色粘土は有機物を含む層である。さらにこの地点での最下層である第14層：暗青灰色砂礫層からは弥生時代中期から後期の遺物が出土し、谷状地形の３段目の落ち込みと思われる部分を一部検出している。Ａ区で確認された３段目の落ち込みの土層とは若干違う様相を呈しているが、床面が砂礫層であるという点は類似しており、出土遺物から考えてもほぼ同時期のものと考えられたために谷状地形が南側へも続いているものと判断した。第３層から第14層は出土した遺物量は少ないものの、遺物包含層と考えられる。

３．Ｄ区

標高約4.80mが現況地盤で、表層の第１層は建物解体時の影響を受け、著しく攪乱されていた。標高4.60m、表層直下の第２層：暗灰褐色土からは、Ａ区でも確認された谷状地形の西側肩部が確認された。なお、暗灰褐色土はよく締まった堅い土層で40～50㎝の厚い堆積である。第２層以下、標高4.10m～3.50m間に堆積する第３層から第11層は全体的に薄い層の堆積が見受けられ、第９層：灰色砂質粘土は有機物を含む層であった。

また、第12層：灰白色粘土ではＡ区で見られた西側谷部２段目の落ち込みを確認した。Ａ区での落ち込みよりもやや深く落ち込む様相を呈していた。そして３段目の落ち込みを第13、14層で検出している。この層は、拳大の礫や玉髄・弥生土器を含む砂礫層であり、Ａ区の３段目の落ち込みで堆積していた砂礫層に繋がる層と判断した。第２層から第14層については、出土遺物は少なかったものの、遺物の時期から弥生時代から古墳時代の遺物包含層であると考えられた。この地点での土層堆積状況の結果から、包含層を含む谷状地形は本遺跡の南北を横断するように形成されているということが判明した。

第３節　遺　構

土坑 SK01（第15図）

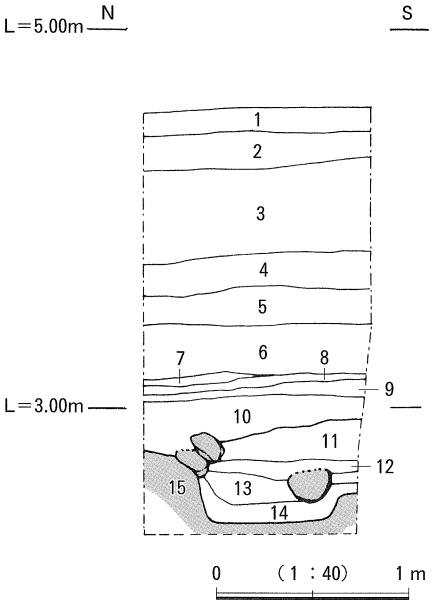
Ａ区の西端から13.50ｍ地点（Ｔ11）付近、標高2.70～2.75ｍを測る場所に位置する縄文時代のドングリの貯蔵穴である。平面形は工事の建物基礎による改良材埋設箇所により消滅し確認できなかったが、断面での確認ができた。現状では上縁部径は不明だが、底部径64.0㎝、深さ最大34.2㎝を測る。

貯蔵穴は第15層：緑青灰色土の地山をＵ字状に掘り込んで作られていた。出土遺物としては自然石が３個、また、土坑底部の第14層：黒色有機物層からアカガシやシイなどのドングリが少量出土し、縄文土器も出土している。ドングリは遺存状態の良いものについて取り上げを行った。この有機物層は木の枝や松葉を含み、第13層：淡灰色粘土は炭を含んでいた。

SK01 出土遺物（第16図）

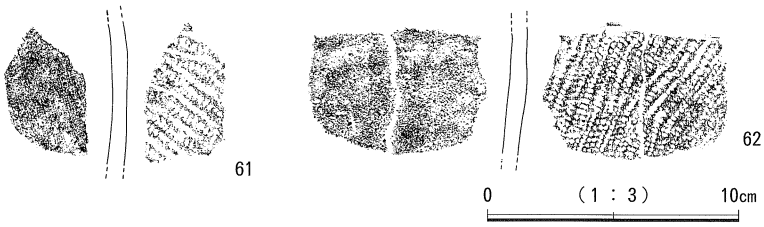
SK01からは小ぶりな人頭大の自然石が３個、縄文土器が４点、少量のドングリが出土した。第16図に示した61、62は外面に縄文施文のみられる深鉢と考えられる体部片で内面はナデ調整を施し、外面には炭化物が付着する。時期はいずれも縄文時代中期[註3]と考えられる。

そして、ドングリには苦みのもとのタンニンが含まれていて、アク抜きをしなければ食べられないということを縄文時代の人々は理解し、湧水のある場所に貯蔵穴をつくり、水辺などの長期保存に適した場所を選んでいたのではないだろうか。また、シイもあったことから、単にアク抜きのための貯蔵穴ではなく、水に浸かっていることが考えられるために“虫殺し”の役割を伴った貯蔵穴であった可能性も示唆しておく。



第15図　SK01土層断面図

1．撹乱土（改良材混じる）
2．暗灰褐色土
3．暗灰褐色粘質土
4．暗黒褐色土
5．淡灰色砂質粘土
6．暗茶褐色粘土（弥生土器片含む）
7．灰色砂
8．淡茶灰色有機物層
9．暗灰色砂
10．暗青灰色砂礫層
11．黒灰色粘土
12．オリーブ灰色シルト
13．淡灰色粘土（炭含む）
14．黒色有機物層（縄文土器、ドングリ含む）
15．緑青灰色土（地山）



第16図　SK01出土遺物

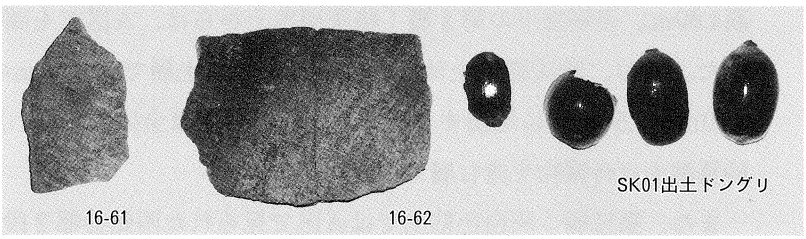
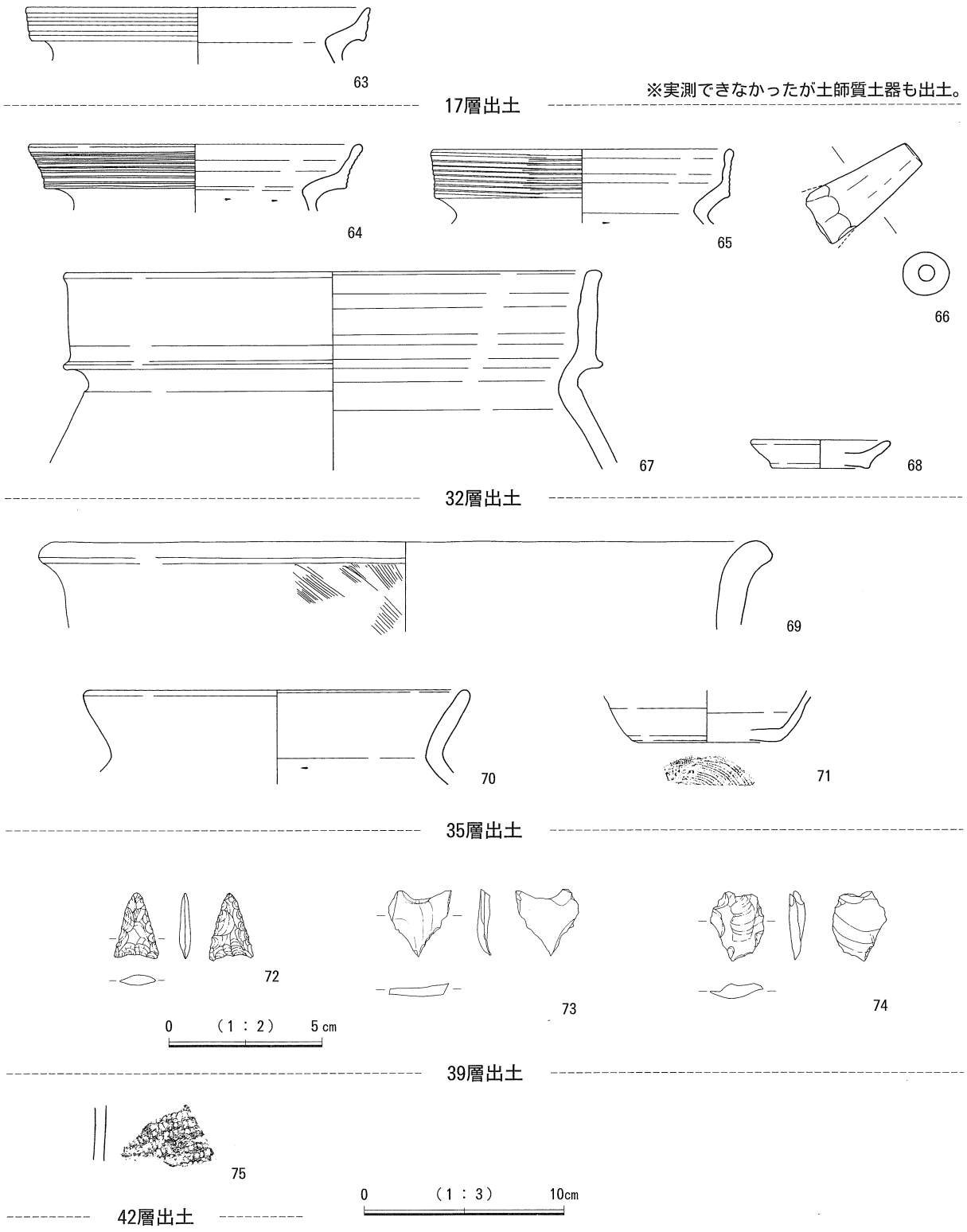


写真　SK01出土遺物

第４節　谷状地形埋土の出土遺物

立会調査で出土した遺物については可能なかぎり層位的に区別し、取り上げをおこなった。出土した遺物の大半は破片で、摩耗しており、調整痕などが不明瞭なものが多いため、実測可能で、その中で特徴的なもの取り上げて実測した。ここでは、調査区間ごとに層位の高い位置で出土した遺物から順に掲載している。



第17図　Ａ区　出土遺物（土器、石器、剥片）

１．Ａ区の出土遺物（第17図）

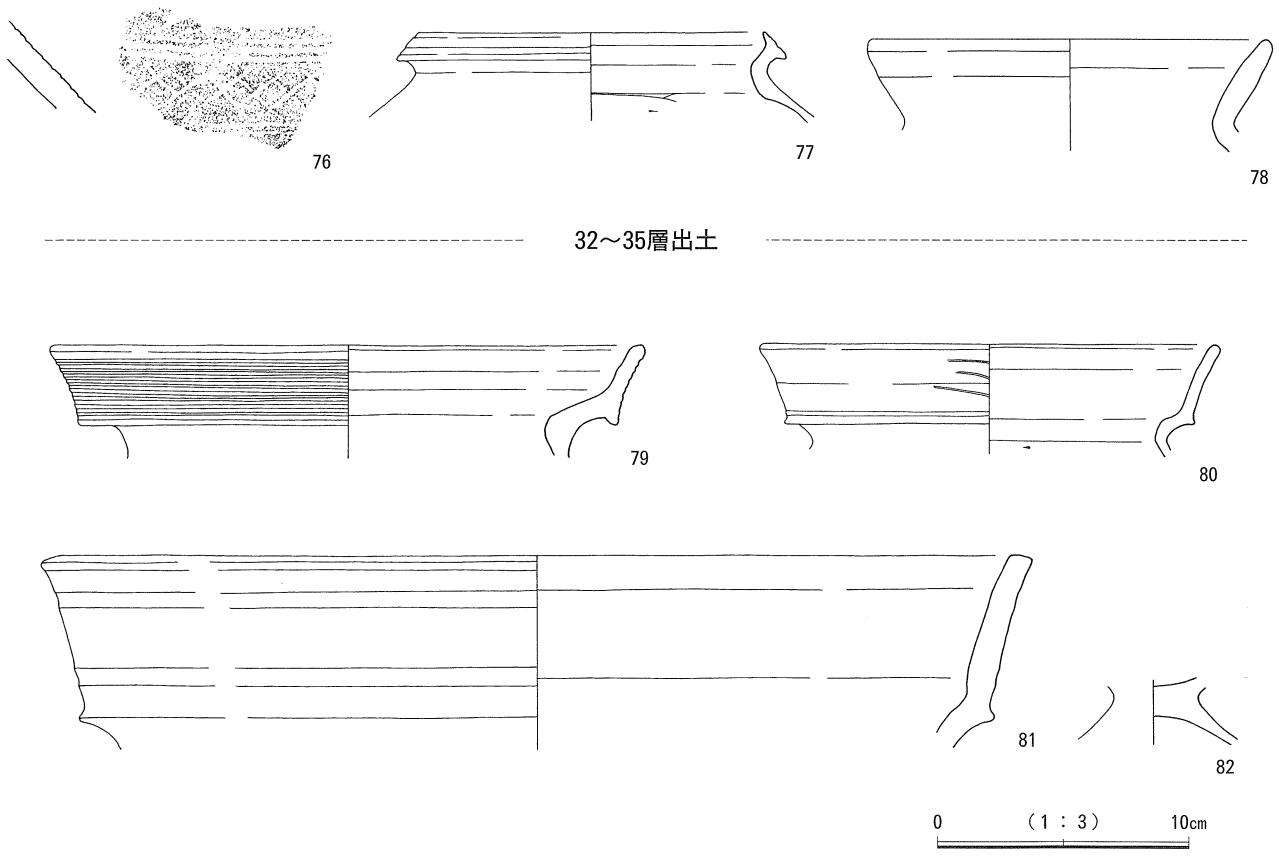
第17層は弥生時代後期～中世の遺物包含層ではあるが、古墳時代～中世にかけての遺物は極小で摩滅が激しく、実測が不可能であった。63は第17層から出土した弥生時代後期Ⅴ－２様式の甕である。口縁部は内傾せずほぼ直立し、その外面に３条の凹線を施す。

64～68は第32層から出土した遺物である。64、65は弥生時代後期Ⅴ－３様式の甕である。64は口縁部をやや外傾させ、その外面に貝殻腹縁による擬凹線文を巡らしている。65は口縁部を上方に繰り上げ、その外面に多条の沈線を施す。施文は貝殻腹縁による擬凹線文を巡らす。66は注口土器の注口部である。67は土師器の甕で、口縁部を直立させ、やや高い立ち上がりで上方に繰り上げている。68は土師質土器の皿で、底部に回転糸切り痕をもつと思われるが、摩耗しているため定かではない。

69～71は第35層から出土した土師器である。69は単純口縁の甕で、口縁端部を丸く納め、やや厚手である。70は甕で、口縁部が「く」の字状を呈する単純口縁である。71は須恵器の無高台坏の底部で、回転糸切り痕をもつ。

72～74は第39層の砂礫層から出土した石器類である。72は黒曜石製の石鏃で形態は平基無茎鏃である。法量は長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量0.75gを測り、鏃身部が二等辺三角形を呈し、全面に加工を施している。73、74は玉髄の剥片で、側縁に明確な打面を持つものの、その後の加工は施されていない。

75は最下層の第42層、流木下から出土した縄文土器（縄文時代中期）で、外面に縄文を施している。



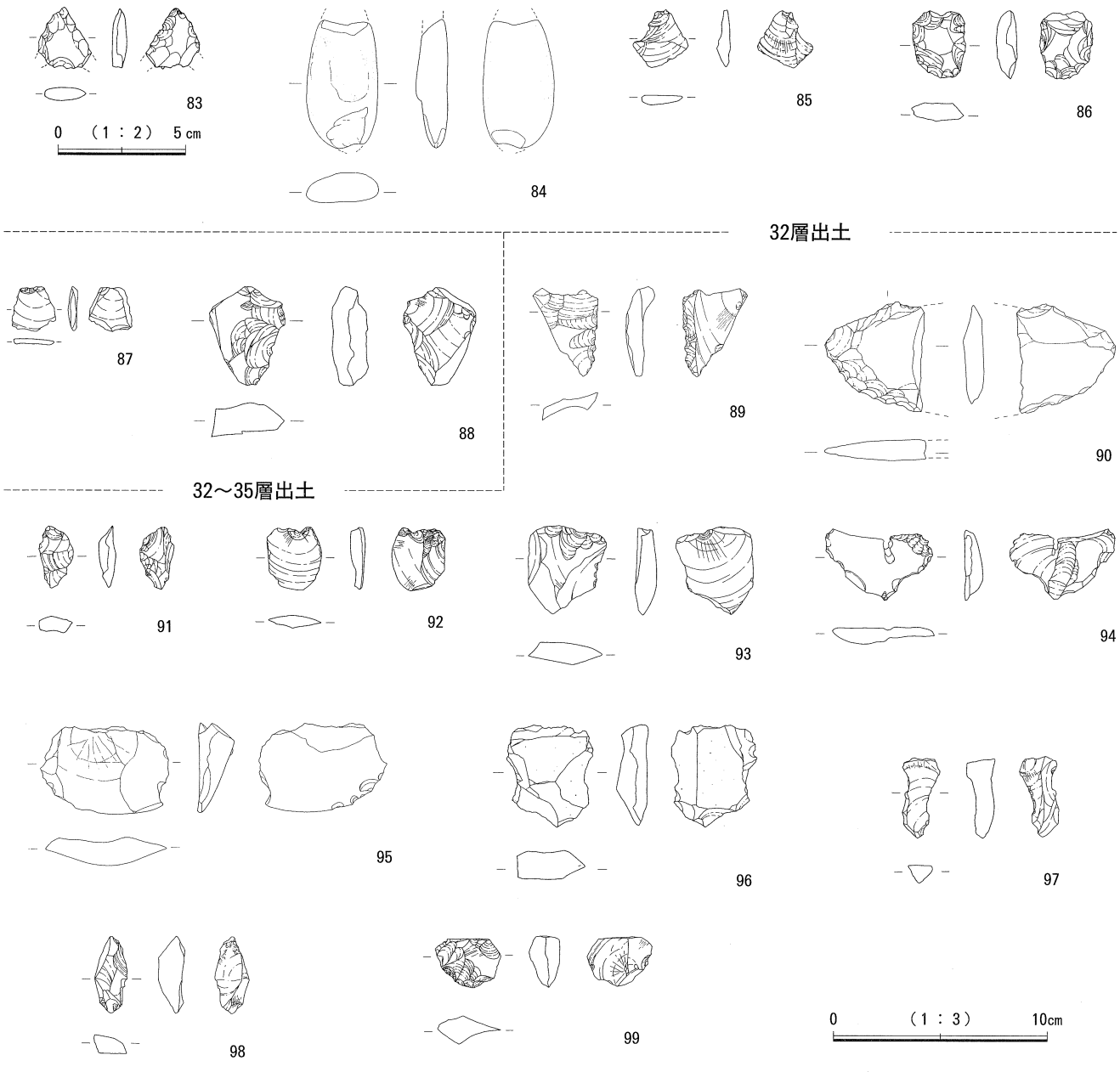
第18図　Ｂ区　出土遺物（土器）

２．Ｂ区の出土遺物（第18・19図）

76～78は第32～35層から出土した遺物である。76は弥生時代中期Ⅲ様式の壷の頸部片で、外面に斜格子文を施している。77は弥生時代Ⅳ－２～Ⅴ－１様式の甕で、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部がわずかに拡張され、その平坦面がやや内傾し、下端部がわずかに下方に延びる。外面には凹線文が施される。78は土師器の甕で、口縁端部を丸く納め、「く」の字状を呈する単純口縁である。

79～82は第32～39層から出土した。79、80は弥生時代後期Ⅴ－３～４様式に相当する甕で、79は口縁部をやや反り気味に立ち上げ、外面に多条の沈線を施す。80はわずかに外側に開きながら口縁部を上方に繰り上げる。81は弥生時代後期Ⅴ－４様式の甕で、口縁部をほぼ直立に立ち上げ、やや厚手で外面に擬凹線文を施す。82は弥生時代後期Ⅴ－４様式の低脚坏である。

83～99は石器・石錘・剥片・残核である。83～86は第32層から出土している。83は黒曜石製の石鏃



第19図　Ｂ区　出土遺物（石器・加工痕をもつ石・剥片・残核）

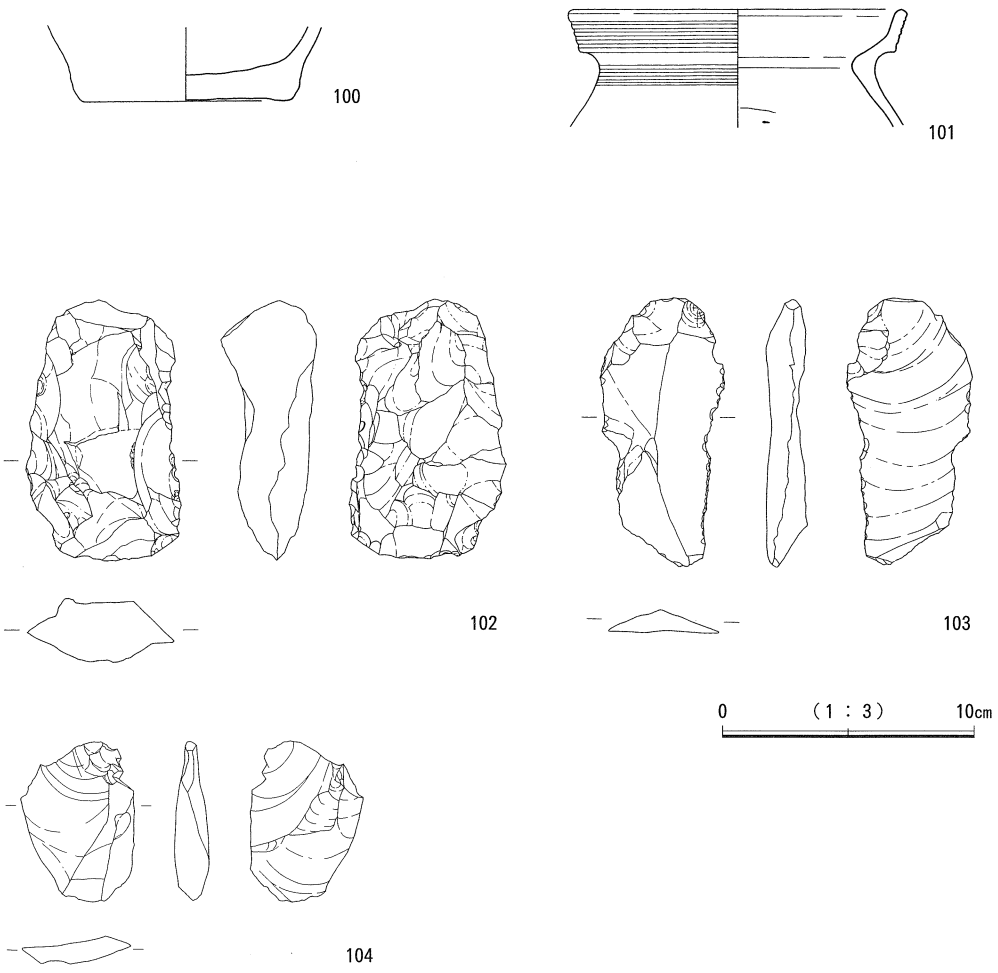
で、脚部が欠損し周辺部のみ加工を施している。84は石錘で上方は欠損しているが、下方に加工の痕跡が残る。85、86は黒曜石の剥片で、明確な打面を持つものの、その後の加工は施されていない。87、88は第32～35層から出土している。87は黒曜石製で側面の片側のみに加工が施され、台形型石器を思わせる形状である。88は黒曜石の残核である。

89～99は第32～39層から出土している。89は黒曜石製で側面の片側のみに加工が施されている。90は安山岩製で片側側面の端部に加工を施している。91～94は黒曜石の剥片である。明確な打面を持つものの、その後の加工は施されていない。95は玉髄の剥片、96は頁岩の剥片である。97～99は黒曜石の残核で、両面に剥離痕が見られる。

３．Ｃ区、Ｄ区の出土遺物（第20図）

100はＣ区付近の標高3.35ｍで出土した、弥生時代中期Ⅲ－１～２様式の甕の底部で、かすかに上げ底で外面は赤褐色を呈する。101はＤ区で出土した弥生時代後期Ⅴ－３様式の甕で、口縁部をやや外傾させ、外面に多条の沈線を施す。また、外面には炭化物が付着している。

102～104は第６、14層から出土した石器類である。102は玉髄で両面に加工痕や細かい剥離痕を持つ。103も玉髄で縁辺に大小の剥離痕を持つ。104は玉髄の剥片で明確な打面を持つものの、その後の加工は施されていない。



第20図　Ｃ区、Ｄ区出土遺物（土器・加工痕をもつ石）

第5章　総　括

今回の一連の調査は建物で影響のある部分だけの調査であり、面的な全面発掘ではなかったが、3段に落ち込む谷と谷部分に堆積する遺物包含層、ドングリの貯蔵穴（SK01）を1個検出することができた。

調査地は大橋川流域の嵩山から南へ延びる丘陵と、茶臼山から北へ延びる丘陵によって大橋川の川幅が狭まる場所にあたり、現況では平地になっている。今回の調査により谷状地形であったことが判明し、谷がいつ頃に形成されたかは定かではないが、縄文時代中期には丘陵と丘陵に挟まれた谷地形であったと考えられる。今回調査範囲で確認された谷部分の規模は東側端部が確認できなかったため推定ではあるが、東西方向に最大幅約26m以上（標高4.20m付近）を測ると思われる。谷部分は南（山側）から北（川側）へ向かって傾斜がついており、本調査では調査区西端部のT12で1段目の谷の落ち込みの肩部を確認し、立会調査ではA区で谷部の3段の落ち込みが確認された。ただし、攪乱土や工事の工程により、東端の落ち込みは検出できなかった。この落ち込みの断面形は河岸段丘状にも見受けられるが、水の流れを示すような砂層は最下層の一部分でしか検出していない。

また、本調査で検出していた遺物包含層については、立会調査において幾重にも重なる堆積が見られ、精査した結果、8層からなる遺物包含層であることを確認することができた。時期的に大別すると縄文時代中期（第42層）、縄文時代中期～弥生時代中期（第37～41層）、弥生時代後期～古墳時代前期（第29～35層）、奈良時代～中世（第17～21層）の4つの時期に分けられ、層位的に区別できたことから今回の成果として述べることとする。

谷状地形から出土した遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器などである。谷状地形埋土の時期を上層から順に、そして出土遺物から概観すると以下のようになる。

- 1段目の落ち込み　－　第17～21層　奈良時代～中世　－　最終段階
- 2段目の落ち込み　－　第29～35層　古墳時代前期　－　第2段階
- 3段目の落ち込み　－　第37～41層　縄文時代中期～弥生時代　－　初期段階

また、一部でしか堆積が確認できなかったが、最下層の42層：淡灰色粘土層からは縄文土器（縄文時代中期）が出土している。

遺構としてはA区の谷の3段目の落ち込み付近（T11）で検出されたドングリの貯蔵穴（SK01）があり、埋土の黒色有機物層からは堅果類とともに縄文土器が出土しており、遺物の時期からSK01は縄文時代中期の遺構と考えられる。このことから付近の縄文遺跡の存在を推測しておく。松江市域で見つかっている堅果類等の貯蔵穴の類例として、八雲町の前田遺跡で25個、大井町の九日田遺跡で23個、鹿島町の佐太講武貝塚で1個の検出例などが挙げられる。前田遺跡や九日田遺跡では土坑の底部にドングリの出土が見られ、埋土にシルト質や粘質の土層を含む点が、佐太講武貝塚では木片や有機物層を含む点が本遺跡と類似している。また、土坑の底面が平坦であること、貯蔵穴の中から石が出土するという点も本遺跡で検出した貯蔵穴と共通しているものと考えられる。

本調査地は河川流域から少し離れた場所にあり、弥生時代前期の遺物は出土しておらず、弥生時代中期の遺物は極めて散漫であった。砂礫層より上層の35層中から弥生時代の遺物、特にV様式の甕が圧倒的に多く出土している。この結果は、弥生時代後期の時期を主体とした集落跡が南側の丘陵部付近にあった可能性を示しているものと推察する。

そして、県内における弥生時代集落の立地は、中期中葉頃に微高地上へも拡大していき、後期にはさらに高い場所の山裾へと拡がっていくことが考えられる。本遺跡の場合、南側の丘陵付近に集落があり、出土した遺物はその集落から谷部分に流れ落ちて堆積したと推測されるため、出土遺物が層位的に時期が前後したり、弥生時代と古墳時代の遺物が同一層から混在して出土することがあった。

さらに、奈良時代には『出雲国風土記』にみられる島根郡の条にある朝酌促戸渡（せとのわたり）という官の渡し場が近くに位置し、その頃と同時期と思われる須恵器が数片だけだが出土していることから、周辺は古代においても生活が営まれ、交通の要所であったことが想像できよう。

最後に、今回の調査で最も出土量の多かった玉髄について触れておく。出土した玉髄の中には製品と思われるものもあるが、大半が未製品または原石であり、剥片も一部に認められたが、人工的なものか自然に割れたものかは不明なため、石器として周辺に流通していたとは考え難い。松江市域の玉髄の産地として有名な玉湯町の花仙山があるが、本遺跡で出土した黒色を呈する玉髄はこの花仙山産とは異なる。石の縁辺が摩耗や剥離をしているものが多く見られ、少量だが人為的に加工しているものもあるのだが、製作の意図が不明なものが多い。縄文時代～弥生時代には、黒曜石やサヌカイトが入手困難な場合に石材の供給地開発をすることがあり、その時期には玉髄が一般的な石材となる。また、本遺跡の南側後背にあたる茶臼山は安山岩帯であり、大橋川を挟んで北側には和久羅山や嵩山から南方へ延びる安山岩帯がある。このことから、付近に玉髄の岩脈がある可能性や供給地であったことが推察される[註4]。（本調査、立会調査を含めて出土した玉髄については図版9に掲載している。）

以上の調査結果より、石屋遺跡は縄文時代中期、弥生時代中期～後期、古墳時代、奈良時代、中世までの遺物包含層を含む谷状地形であることが確認された。今回の調査では遺物包含層の検出に主眼を置いたが、この地は古代より谷地形であり、丘陵側から大橋川へ向かっての自然流路があった可能性も示唆しておく。また、住居跡・集落の痕跡は検出されなかったが調査地より南側、あるいは西側の緩斜面には集落が営まれていたのは間違いない。今回の調査では遺跡の一部を調査したにすぎず、多量に出土した玉髄の流通経路や産地の特定等は今後の検討課題とすべき点ではあるが、本遺跡周辺における石材・石器の利用を考察する上でかけがえのない資料を得たものと考える。

(註)

（1）林正久「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学　46-2』　地理科学学会1991年

（2）（1）と同じ

（3）島根県教育庁埋蔵文化財センター　稲田陽介氏のご教示による。

（4）島根県教育庁埋蔵文化財センター　丹羽野裕氏、伊藤徳広氏のご教示による。

(参考文献)

『島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』島根県教育委員会　2003年

『松江市遺跡地図』松江市教育委員会　1991年

『石台遺跡―馬橋川改修に伴う発掘調査報告書』島根県教育委員会　1986年

『一般国道9号松江道路建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ　勝負遺跡』島根県教育委員会　1992年

『中竹矢1号墳　長峯遺跡』松江市教育委員会　1987年

『国道9号線バイパス建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』島根県教育委員会　1987年

山本清「松江市矢田町来美の四隅突出型墳丘」『間内越1号墳　間内越遺跡』松江市教育委員会　1987年

『寺山小田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団　1996年

『矢田平所遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会　1993年

「Ⅵ　松江・東光台古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅳ集』島根県教育委員会　1972年

『史跡石屋古墳』松江市教育委員会　1985年

『松江市手間古墳発掘調査報告　薬師山古墳出土遺物について』島根大学法文学部考古学研究室　2002年

『史跡大庭鶏塚発掘調査報告』松江市教育委員会　1979年

『常設展示図録　古代出雲の中心意宇　八雲立つ風土記の丘の歴史と文化』島根県八雲立つ風土記の丘　2007年

『松江市東部における古墳の調査』島根県教育庁古代文化センター　島根県教育庁埋蔵文化財センター　2004年

岡崎雄二郎「十王免横穴群」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会　1975年

「Ⅸ　松江・東光台横穴」『島根県埋蔵文化財発掘調査報告書　第Ⅰ集』島根県教育委員会　1969年

『一般国道9号線松江道路建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ　中竹矢遺跡』島根県教育委員会　1992年

「狐谷横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告第7集』島根県教育員会　1977年

『出雲国分寺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会　2004年

『来美廃寺「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』島根県教育委員会　2002年

『山代郷北新造院跡　史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院（来美廃寺）発掘調査報告書』島根県教育委員会　2007年

『小無田Ⅱ遺跡』松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団　1997年

『国道9号線バイパス発掘調査報告書Ⅳ　才の峠遺跡』島根県教育委員会　1983年

『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅶ　茶臼山城跡　市場遺跡　内堀石塔群』島根県教育委員会　1990年

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992

「弥生時代後期の遺構・遺物に関する諸問題」『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区Vol.2』島根県教育委員会　2007

『九景川遺跡』島根県教育委員会　2008

『国道9号線バイパス建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（石台遺跡）』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1989

『国道9号線バイパス建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会　1991

『佐太講武貝塚発掘調査報告書2』鹿島町教育委員会　1994

『九日田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会　2000

『一般国道432号道路改良工事予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　前田遺跡（第Ⅰ調査区）』八雲村教育委員会　1999

『一般国道432号道路改良工事予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　前田遺跡（第Ⅱ調査区）』八雲村教育委員会　2001

丹羽野裕ほか「出雲地方における玉髄・瑪瑙製石器の研究」『島根県古代文化センター調査研究報告書20』島根県古代文化センター　2004

『輝く出雲ブランド　古代出雲の玉作り』島根県立古代出雲歴史博物館　2009

木下正史『古代日本の全体像』新人物往来社　2011

表2　遺　物　観　察　表　（土器）

挿図番号	出土地点	出土層位	種類	器種	口径／底径（cm）	形態・手法の特徴	備　　考
5-1	試掘　T-7	暗灰色粘土層灰色砂礫層	弥生土器	甕	16.2	ヘラケズリ、ナデ調整、凹線文？	
5-2	試掘　T-7	暗灰色粘土層灰色砂礫層	弥生土器	甕	12.0	ヘラケズリ、ナデ調整	
9-4	T5	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	15.1	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	
9-5	T5	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	18.0	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による
9-6	T5	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	27.8	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整、ミガキ	貝殻腹縁による
9-7	T5	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	31.0	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整、ミガキ	貝殻腹縁による
9-8	T5	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	18.9	擬凹線文、ナデ調整	
9-9	T5	暗灰色粘質土	弥生土器	器台	14.7	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	
10-13	T10	暗灰色粘質土	縄文土器	鉢	—		
10-14	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	26.1	凹線文、ナデ調整	
10-15	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	—	凹線文、ナデ調整	
10-16	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	—	斜格子文、刺突文	
10-17	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	—	列点文、凹線文	
10-18	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	—	斜線文、凹線文、斜格子文	
10-19	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	壺	13.5	凹線文、ナデ調整	
10-20	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	20.6	凹線文、ナデ調整	
10-21	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	14.6	凹線文、ナデ調整	
10-22	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	17.7	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による
10-23	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	20.7	擬凹線文、ナデ調整	貝殻腹縁による
10-24	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	20.8	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による
10-25	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	16.0	風化のため、調整不明	一部に煤が付着
10-26	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	甕	15.0	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	一部に煤が付着
10-27	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	高坏	17.3	凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	三角形透し孔
10-28	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	高坏	16.5	凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	
10-29	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	高坏	—	ミガキ	
10-30	T10	暗灰色粘質土	弥生土器	低脚坏	5.3	風化のため、調整不明	
10-31	T10	暗灰色粘質土	土師器	甕	12.2	ナデ調整	
10-32	T10	暗灰色粘質土	土師器	甕	17.0	ナデ調整	
10-33	T10	暗灰色粘質土	土師器	甕	27.2	ナデ調整	全体に煤が付着

表2　遺　物　観　察　表　（土器）

挿図番号	出土地点	出土層位	種類	器種	口径／底径（cm）	形態・手法の特徴	備　　考
10-34	T10	暗灰色粘質土	須恵器	坏	6.2	ナデ調整	
10-35	T10	暗灰色粘質土	土師質土器	皿	6.3	ナデ調整	回転糸切り
12-55	T13	暗灰色粘質土	土製品	土錘	1.2		
12-56	T14	暗灰色粘質土	土製品	土錘	1.3		
12-57	T15	暗灰色粘質土	土師器	甕	17.3	沈線、ナデ調整	
16-61	SK01	黒色有機物層	縄文土器	鉢	—		
16-62	SK01	黒色有機物層	縄文土器	鉢	—	ナデ調整	
17-63	A区	黒色粘質土層（第17層）	弥生土器	甕	17.0	凹線文	
17-64	A区	暗褐色土層（第32層）	弥生土器	甕	16.5	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による
17-65	A区	暗褐色土層（第32層）	弥生土器	甕	14.8	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による
17-66	A区	暗褐色土層（第32層）	弥生土器	注口土器	1.4	ナデ調整	
17-67	A区	暗褐色土層（第32層）	土師器	甕	26.7	ナデ調整	
17-68	A区	暗褐色土層（第32層）	土師質土器	皿	6.8	ナデ調整	回転糸切り
17-69	A区	暗褐色土層（第35層）	土師器	甕	35.3	ハケ目	
17-70	A区	暗褐色土層（第35層）	土師器	甕	19.0	ヘラケズリ、ナデ調整	
17-71	A区	暗褐色土層（第35層）	須恵器	坏	6.8	ナデ調整	回転糸切り
17-72	A区	流木下（第42層）	縄文土器	鉢	—	ナデ調整	
18-76	B区	暗黒褐色土～暗黒褐色土＋明灰色粘土（第32～35層）	弥生土器	甕	—	凹線文、斜格子文	
18-77	B区	暗黒褐色土～暗黒褐色土＋明灰色粘土（第32～35層）	弥生土器	甕	13.9	ヘラケズリ、ナデ調整	
18-78	B区	暗黒褐色土～暗黒褐色土＋明灰色粘土（第32～35層）	土師器	甕	15.7	ナデ調整	一部に煤が付着
18-79	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	弥生土器	甕	23.5	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による
18-80	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	弥生土器	甕	18.0	ヘラケズリ、ナデ調整	一部に煤が付着
18-81	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	土師器	壺	38.0	ナデ調整	
18-82	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	弥生土器	低脚坏	—	ナデ調整	
20-100	C区、D区	淡灰色砂質粘土	弥生土器	甕底部	8.2		
20-101	C区、D区	不明	弥生土器	甕	13.0	擬凹線文、ヘラケズリ、ナデ調整	貝殻腹縁による

表３　遺物観察表（石器・加工痕をもつ石・剥片・残核）

挿図番号	出土地点	出土層位	種類	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材質	備　　考
5-3	建物基礎撤去に伴う立会調査	—	剥片	3.4	3.5	0.9	7.36	玉髄	
9-10	T5	暗灰色粘質土	剥片	3.9	3.2	1.5	11.50	玉髄	
9-11	T5	暗灰色粘質土	剥片	4.7	3.0	1.0	10.57	玉髄	
9-12	T5	暗灰色粘質土	剥片	4.3	2.9	1.0	11.50	玉髄	
11-36	T10	暗灰色粘質土	石錘	7.1	4.9	1.7	79.30	頁岩	上下左右4ヶ所に加工痕
11-37	T10	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	1.7	2.9	0.6	2.44	瑪瑙	細かい剥離痕
11-38	T10	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	4.4	3.1	1.1	11.06	玉髄	側面片側に加工痕
11-39	T10	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	4.3	3.0	1.6	18.64	玉髄	片面下方に加工痕
11-40	T10	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	4.9	5.4	1.9	44.04	玉髄	側面片側に細かい剥離痕
11-41	T10	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	8.1	5.4	2.5	72.48	玉髄	下方に細かい加工痕
11-42	T10	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	7.9	6.7	1.6	88.99	玉髄	側面に加工痕
11-43	T10	暗灰色粘質土	剥片	2.0	1.4	0.4	1.26	黒曜石	
11-44	T10	暗灰色粘質土	剥片	1.8	1.5	0.6	1.25	黒曜石	
11-45	T10	暗灰色粘質土	剥片	2.3	1.3	0.8	2.19	黒曜石	
11-46	T10	暗灰色粘質土	剥片	3.0	1.9	0.9	3.09	黒曜石	
11-47	T10	暗灰色粘質土	剥片	3.2	1.8	0.8	3.13	黒曜石	
11-48	T10	暗灰色粘質土	剥片	3.3	2.4	0.9	5.99	黒曜石	
11-49	T10	暗灰色粘質土	剥片	3.6	3.4	0.9	10.82	黒曜石	
11-50	T10	暗灰色粘質土	剥片	3.1	2.2	0.5	3.78	安山岩	
11-51	T10	暗灰色粘質土	剥片	2.7	3.0	0.5	3.71	玉髄	
11-52	T10	暗灰色粘質土	残核	2.8	1.8	1.3	5.65	黒曜石	
11-53	T10	暗灰色粘質土	残核	2.7	2.2	1.2	4.54	黒曜石	
11-54	T10	暗灰色粘質土	残核	8.0	7.6	2.8	110.00	玉髄	
12-58	T12	青灰色粘質土	残核	5.4	5.2	2.4	67.34	玉髄	
12-59	T13	暗灰色粘質土	剥片	3.3	3.0	1.1	8.76	玉髄	

表３　遺物観察表（石器・加工痕をもつ石・剥片・残核）

挿図番号	出土地点	出土層位	種類	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	材質	備　　考
12-60	T14	暗灰色粘質土	加工痕を持つ石	3.2	2.6	1.1	8.98	黒曜石	
17-72	A区	緑青灰色砂礫層（第39層）	石鏃	2.2	1.4	0.4	0.75	黒曜石	平基無茎鏃
17-73	A区	灰色砂層（第44層）	剥片	3.3	3.0	0.5	4.17	玉髄	
17-74	A区	灰色砂層（第44層）	剥片	3.4	2.6	0.7	4.25	玉髄	
19-83	B区	暗黒褐色土層（第32層）	石鏃	1.9	1.7	0.4	1.22	黒曜石	平基無茎鏃
19-84	B区	暗黒褐色土層（第32層）	石錘	6.0	3.3	1.4	41.89	砂岩	上下2ヶ所に加工痕
19-85	B区	暗黒褐色土層（第32層）	剥片	2.6	2.7	0.4	1.85	黒曜石	
19-86	B区	暗黒褐色土層（第32層）	剥片	3.1	2.5	1.0	7.34	黒曜石	
19-87	B区	暗黒褐色土～暗黒褐色土＋明灰色粘土（第32～35層）	加工痕を持つ石	2.0	2.0	0.3	1.31	黒曜石	台形形石器か？
19-88	B区	暗黒褐色土～暗黒褐色土＋明灰色粘土（第32～35層）	残核	4.6	3.4	1.5	22.25	黒曜石	
19-89	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	加工痕を持つ石	4.0	3.0	0.7	5.69	黒曜石	側面片側に加工痕
19-90	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	加工痕を持つ石	5.2	4.5	1.0	23.11	安山岩	上下に加工痕
19-91	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	剥片	2.9	1.5	0.6	2.26	黒曜石	
19-92	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	剥片	2.9	2.4	0.7	4.01	黒曜石	
19-93	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	剥片	4.0	3.6	1.0	12.23	黒曜石	
19-94	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	剥片	3.0	4.9	0.8	9.53	黒曜石	
19-95	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	剥片	4.2	5.9	1.7	32.78	玉髄	
19-96	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	剥片	4.7	4.0	1.4	29.67	頁岩	
19-97	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	残核	3.7	1.6	0.8	4.00	黒曜石	
19-98	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	残核	3.7	1.5	1.2	4.51	黒曜石	
19-99	B区	暗黒褐色土～青灰色砂礫層（第32～39層）	残核	2.3	3.0	1.4	6.40	黒曜石	
20-102	C区、D区	淡灰色砂礫層～暗青灰色砂礫層（第６、14層）	加工痕を持つ石	10.3	6.0	3.8	22.00	玉髄	
20-103	C区、D区	淡灰色砂礫層～暗青灰色砂礫層（第６、14層）	加工痕を持つ石	10.7	4.9	1.6	64.38	玉髄	
20-104	C区、D区	淡灰色砂礫層～暗青灰色砂礫層（第６、14層）	加工痕を持つ石	6.4	4.4	1.3	26.31	玉髄	

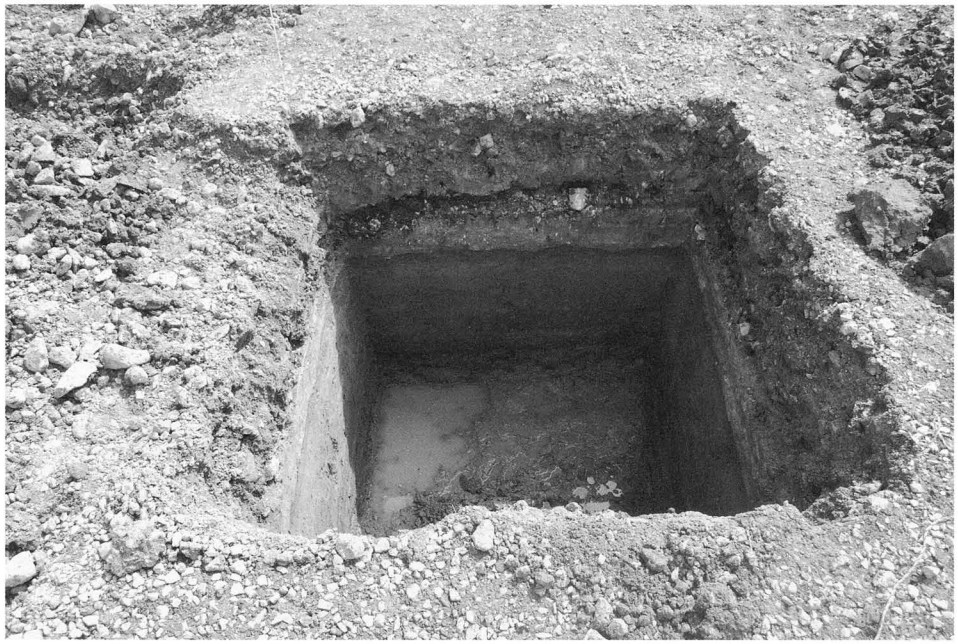
図　　版

調査前〈建物解体前〉全景（北西から）

調査前〈建物解体後〉全景（南西から）

図版 2

本調査
T12完掘状況
〈谷状地形西側肩部〉



本調査
T10完掘状況

本調査
T 8 完掘状況
（地山が削平されている）

立会調査
A区
谷状地形及び包含層西側始点

立会調査
A区
谷状地形 3 段目落ち込み

立会調査
B区
T10東壁

図版 4

立会調査
C区
北壁土層断面

立会調査
D区
谷状地形及び包含層検出

立会調査
D区
谷状地形 2 段目落ち込み検出

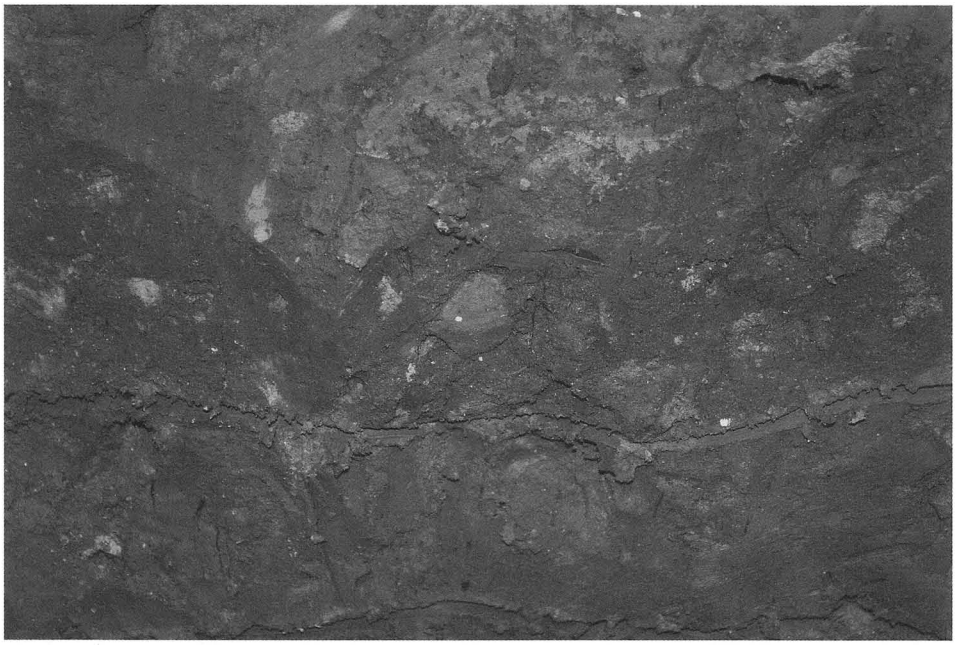
流木検出状況

SK01土層断面

立会調査（T10）付近の土層断面（A区）

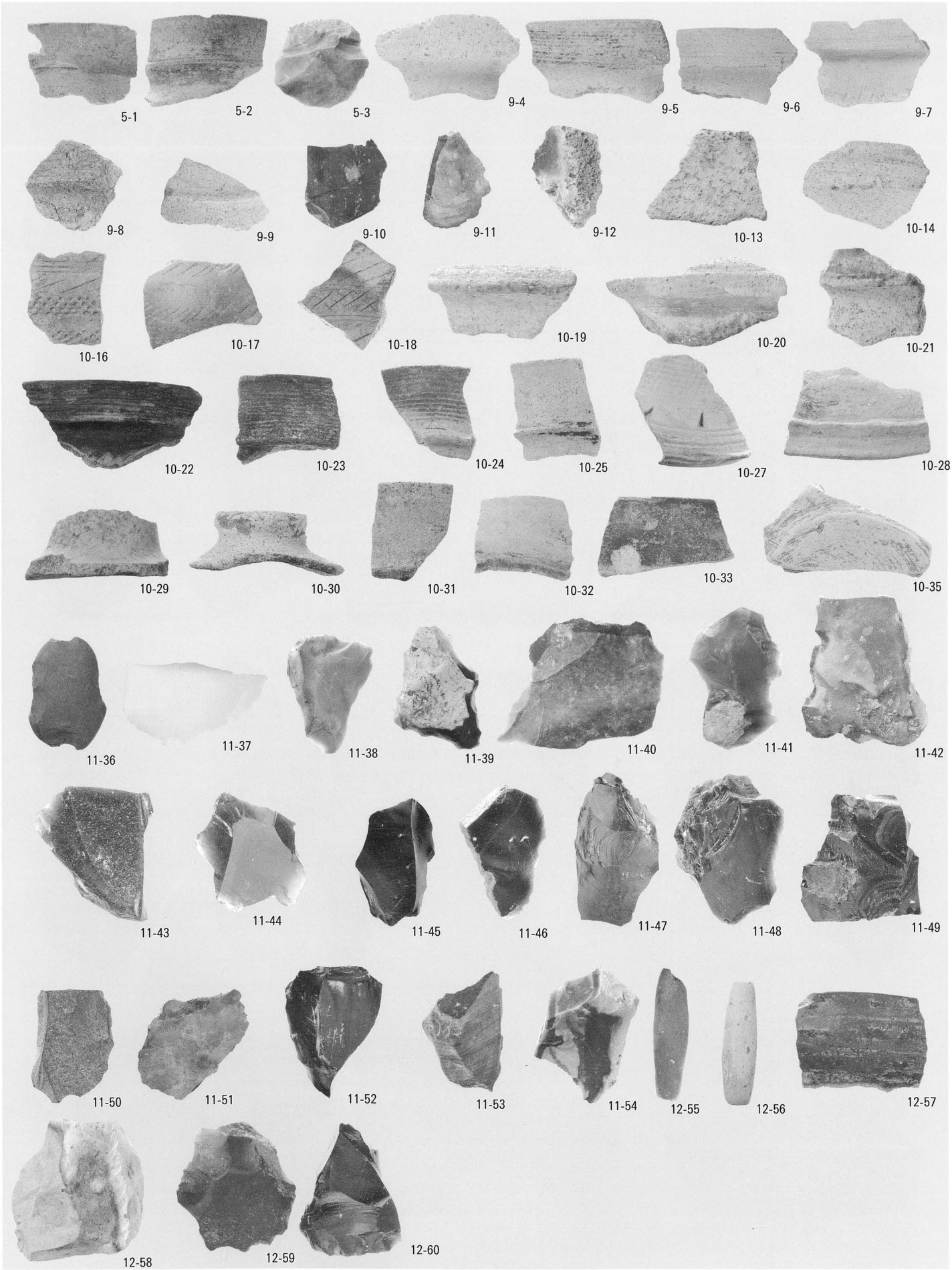
図版 6

遺物出土状況
（弥生土器）



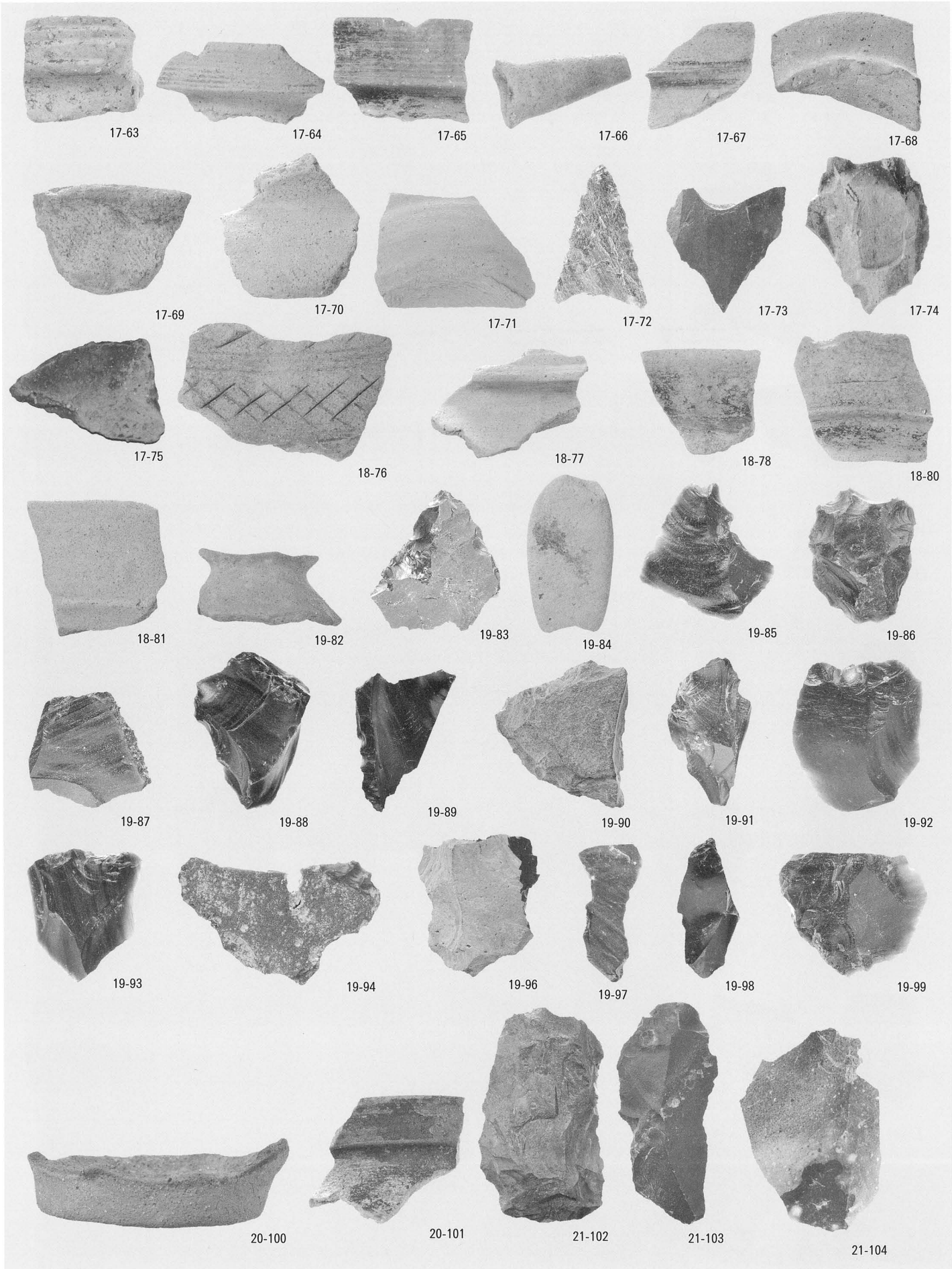
遺物出土状況
（弥生土器）

遺物出土状況
（玉髄）



試掘調査・本調査出土遺物

図版 8



立会調査出土遺物

出土遺物（玉髄）

出土遺物〈玉髄：原石もしくはそれに近いもの〉

報 告 書 抄 録

ふりがな	にとりまつえてんしんちくこうじにともなう いしやいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	ニトリ松江店新築工事に伴う 石屋遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第143集
編著者名	石川崇　小山泰生
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	文化財課　〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F TEL：0852-55-5284 埋蔵文化財課　〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL：0852-85-9210
発行年月	2011年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
いしやいせき 石屋遺跡	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 ひがしつだちょう 東津田町	32201	D1093	35°27′11″ 133°05′53″	20101001 ～ 20101008 20101105 ～ 20101117	（本調査） 112.5㎡ （立会調査） 240.2㎡	店舗新築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石屋遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	自然流路 土坑	縄文土器 弥生土器 土師器 石鏃 石錘	谷からドングリの貯蔵穴を検出した。

松江市文化財調査報告書第143集
ニトリ松江店新築工事に伴う
石屋遺跡調査報告書

平成23年３月

発行　松江市教育委員会
　　財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷　有限会社　松陽印刷所
　　島根県松江市学園南2－3－11